

第19表 木製品一覧

種別	種別番号	図版	遺構	建物	座標	種類	製法(長×幅×厚cm)	樹種	備考
148	3	122	SP83	S B1		柱	23.0-12.0		
	4		SP113	S B1		柱	28.8-9.8		
	7		SP175	S B1		柱	47.5-11.0		
	9		SP150	S B1		加工木	11.8-6.1-0.6		
	10		SP186	S B1		礎板?	7.8-5.8		
	11		SP194	S B1		加工木	12.3-6.2		
	12		SP194	S B1		柱	16.0-12.5		
	13		SP205	S B1		柱	40.0-19.0		
	18	122	SP253	S B1		柱	72.0-10.5		
	19		SP277	S B1		柱	27.0-15.5		
	20		SP286	S B1		柱	24.5-6.6		
150	28	121	SP393	S B1		円形板	13.0-4.0		漆塗
	43		SP586	S B2		加工木	11.5-3.6-1.0		
	51		SP81	S B3		杭	16.0-3.8		
151	52		SP123	S B3		柱	33.0-12.0		
	53	121	SP124	S B3		箱?	6.5-5.7		漆塗
	55	122	SP165	S B3		柱	38.0-7.0		
	60	122	SP168	S B3		柱	43.5-12.0		
	61	122	SP218	S B3		柱	66.0-15.0		
152	62		SP358	S B3		柱	42.0-12.3		
	63		SP525	S B4		円形板	20.6 5.3-1.3		
	64		SP536	S B4		柱	25.5-10.0		
	66		SP53			加工木	29.5-3.2		穿孔
	67		SP116			柱	33.0-6.0		
	71		SP244			円形板	12.8-1.6		漆塗
	73		SP350			柱	45.0-13.0		
	75		SP459			杭	59.0-10.0		
	76		SP459			杭	41.5-10.0		
	77		SP460			杭	38.0-7.0		
153	78		SP460			杭	28.0 3.3		
	79		SP460			加工木	10.5-5.1		
	80		SP519			柱	53.0-13.0		
	92		SD2			漆板	6.2-3.6-0.5		
	93		SD2			漆板	6.8-3.8-0.6		
	94		SD2		X36Y61	加工木	13.5-8.8-4.4		
	107		SD403			加工木	11.2-3.0		
155	108	122	SD403		X37Y60	加工木	17.5-3.8		穿孔
	131		SK456		X47Y79	曲物	12.8-3.3		
156	137	121	SE530			曲物	30.1-3.5	ヒノキ科	
	138		SE530			朝霞丸太	35.5-27.0-2.0	ブナ	井戸側
	139		SE634			加工木	32.0-7.0-0.5		井戸側か
	140		SE634			加工木	32.0-7.0-0.8		井戸側か
	142		SK30			加工木	10.5-2.0		
	145		SK39			加工木	11.4-1.3-1.0		
157	154	121	SK111			円形板	15.0-6.5-0.7		
	166		SK170			加工木	6.1-4.2-0.6		
	167		SK170			加工木	13.3-5.0		
	177	121	SK259			下駄	22.5 8.0	ヒノキ科	
	183		SK280			加工木	17.7-2.4		
	191		SK296			加工木	12.8-3.9		
	192	121	SK296			円形板	7.4-4.9		穿孔
	198		SK348			曲物	10.8-1.6		穿孔
159	199		SK348			曲物	10.8-1.6		穿孔
	200		SK348			曲物	10.8-1.6		穿孔
	212	122	SK373			加工木	13.3-4.0		
	218		SK395		X46Y71	円形板	9.8-2.0		
	225		SK402			漆板	5.0-3.1-0.8		
	226	121	SK402			下駄	21.8 7.5	ヒノキ科	
	227		SK402			加工木	13.0-3.0		
	228		SK402			曲物	7.3-3.6		
	229		SK402			折敷?	18.7-3.5		
	234		SK452			加工木	15.5-2.5-1.0		
160	235		SK452			加工木	31.0 7.2-1.7		
	254	121	SK482			箱	7.2-2.1		
	259		SK500			加工木	11.0-2.0-1.4		
	261		SK582			漆板	11.0-5.3 0.8	ブナ	
162	268		SK600			曲物	7.7-2.6		
	269		SK600			加工木	25.0 2.5-1.7		

第20表 石製品一覧

採回	採回番号	図版	遺構	建物	座標	種類	規格(長×幅×厚×重さcm・g)	石材	備考
148	8	125	SP175	S B 1		磁石	14.5-***-***-400	砂岩	
149	17	123	SP249	S B 1		石臼	30-15.5-***-16000	凝灰岩	下白
150	36	124	SP483	S B 2		石鉢	16.0-***-***-1000	凝灰角礫岩	
152	59	125	SP168	S B 3		石碗	** - 5.3 - 1.5 - 46.93	泥岩	馬付着
153	74	123	SP459			石臼	24.5-***-***-3500	凝灰岩?	上白
154	25	123	SD2			石臼	21-***-***-2200	凝灰角礫岩	上白
159	208	125	SK363			茶臼	30-***-***-4100	砂岩	下白
160	219	125	SK395		X46Y71	石碗	** - * - * - * - 13.11	泥岩	
170	450	124			X47Y88 I	石臼	19.5-***-***-2300	凝灰岩?	上白
	451	124			X48Y87	石臼	20.5-15-***-7000	凝灰岩?	上白
	452	124				石臼	29.5-12-***-11000	凝灰角礫岩	下白

欠損などにより計測不能な場合*で示した。

第21表 金属製品一覧

採回	採回番号	図版	遺構	座標	種類	規格(長×幅×厚cm・g)	材質	時期	備考
154	83	125	SD1	X45Y77	雄管	7.5-3.2-1.5-13.50	銅	17C	
	96	125	SD2	X38Y61		4.5-2.2-1.6-43.54	鉄		
156	132	125	SK456	X49Y80	馬鍔の刀	16.7-3.0-1.2-95.35	鉄		
157	168		SK170		鏡	2.4	銅	初辨1368年	洪武通寶、背上「治」
158	172	125	SK196		雄管	7.2-2.5-1.0-6.37	銅	16C末~17C	
159	193		SK296		鏡	2.5	銅	初辨1408年	永樂通寶
170	453			X39Y68 II	鏡	2.4	銅	初辨1636年	寛永通寶

鏡の場合、規格は径を示している。

禄・天正年間(1558～1591)には、佐々氏、前田氏により、しばしば戦いの地となっている。永禄2年(1559)、上杉謙信が木舟城攻略の為に、城下の大竹町に放火するという記録がある¹³ことから、永禄年間(1558～1569)には、木舟城の築城が完備し、城下町が最盛の発達を遂げていたと考えられている。その後、前田氏が城主となるが、天正13年11月(西暦1586年1月18日)の大地震により城は崩壊し、城主前田秀継夫妻は落命している。翌14年に子息前山利秀は今石動城へ遷っており、城下の住民も石動や高岡へ移り住んだとされ、木舟城の周辺は農村と化した。遺跡は遺物の時期から16世紀中頃前後から末頃を主体とする集落で、城下町の形成と衰退の時期ともほぼ一致している。

B 町並みの変遷

遺跡は東西を自然河川に挟まれた中洲状の土地に位置しており、南北方向の2条の道路に沿うように建物が配置される。遺跡中央の道路に挟まれた部分は幅7m～15m、最大で32m、奥行き20m～25mの長方形に区画されている。建物は一部重複する個所があり、2～3棟の切り合いがみられる。建物同士の間隔関係、配置、出土遺物から大きくI期29棟、II期25棟の2時期に分けることができる。さらにII期の建物群の間で一部重複がみられることから、2小期に分かれるものと思われ、II1期、II2期とした。また、詳細時期不明の建物もII2期として扱っている。

I期 I期の建物は29棟あり、道路に沿って整然と配置されている。建物は道路に対して並行に配置され、建物の裏の空間に井戸、SB32・SB38では島が付随する。道路1沿いでは道路が緩くカーブするのに合わせて建物も弧を描くように並び、道路に面した側の柱列は直線状に通る。道路2沿いは道路1沿いほど整然とはしていないが、やはり道路に沿って区画ごとに建物が配置されており、建物の東側には、建物と並行な区画溝・柵がある。町並みの中央やや南には、幅約3.5mの帯状の遺構空白地帯がある。この空白地帯の両端を区画溝が併走しており、道路1と道路2をつなぐ小路の可能性もある。また、この小路沿いのSB23・SB25・SB28・SB29の4棟は、小路に面した側の柱列が揃っており、I期に属するものとした。

I期の建物としたものの大半は、道路に面して柱列が揃うことを根拠としている。建物の切り合い関係では、遺構が直接切り合う例は少なく、3例みられるだけである。1例めはSB4とSB5で、SB5の柱穴がSB4の土間と考えられる土坑SK2331に切られている。SB5は道路1のカーブに沿い、SB6の柱列と並ぶことから、I期の建物とした。2例めはSB25とSB26で、SB25の柱穴がSB26の柱穴に切られている。SB25の方が一段階古い建物であり、小路沿いにSB23と柱列が並ぶことから、I期とした。また、SB29は区画溝SD1039に柱穴が切られていることからI期とした。3例めはSB49とSB50で、SB49の柱穴がSB50に切られていることから、I期とした。出土遺物はSB35の土坑SK7、およびSB37の土坑SK112出土の中世土師器があり、共に16世紀第3四半期頃のものと考えられる。以上のことから、I期は道路1・2を基軸として企画的な高い配置が行われており、町並みの形成時期にあたると思われる。また、出土遺物からは、16世紀第3四半期前後の時期に位置づけることができよう。

II1期 II1期の建物は17棟で、I期のような整然とした配置はみられなくなる。道路1沿いでは道路から建物が離れ、区画の奥側にずれる。道路1の東側では、建物は疎らになるが、道路のカーブに沿った配置についてはI期と変わらない。道路1の西側は、I期では非常に整然としていた建物配置が崩れ、南側に集中する。道路2の東側では、北半の建物がなくなり、I期よりも建物は相対的に西側に移り道路に近づいている。道路に面した側の柱列は、ほぼ直線上に揃う。I期でみられる区画は「屋敷地」を示していると考えられ、II1期でもほぼ同じ敷地内に立て替えているといえるが、町



第172図 開群大滝遺跡中世面全体図

並みの北半では若干の消長がみられる。SB43はⅡ1期になって出現し、SB45はⅠ期よりも建物規模が拡大する。これに伴い南北方向の区画溝は東側に影らむように作り替えられ、道路1に面した側(区画3)は建物が造られなくなり、畜化している。

Ⅱ1期の建物としたものは、Ⅱ1期が相対的に西側に移動した配置をとるものとし、重複関係にあるものや近接した位置にある建物のうち、西側に位置する建物である。建物が直接切り合う例は2例みられる。1例めはSB13とSB15で、SB15の柱穴がSB13の土坑に切られており、SB15をⅡ1期とした。2例めはSB17とSB18で、SB18の柱穴がSB17に切られている。SB18は道路1沿いにSB22以南の建物と柱列が通ることから、Ⅱ1期とした。また、SB34はSB33の西側の柱列と揃うことからⅡ1期とした。出土遺物ではSB10の井戸SE2340、SB20の土坑SK805の中世土師器があり、いずれも16世紀第4四半期に想定できる。これらのことから、Ⅱ1期は16世紀第4四半期前後に位置づけられる。建物は南側に集中するようになり、町並みとしてはやや縮小する。Ⅰ期同様に南北方向の2条の道路を意識した建物配置はみられるが、東西方向の区画はなくなると考えられ、Ⅰ期のような強い企画性は薄れる。一方で、南北方向の区画は作り替えが行われており、町並みの「再編」とまではいかなくても若干の「整理」が行われた段階と考えられる。

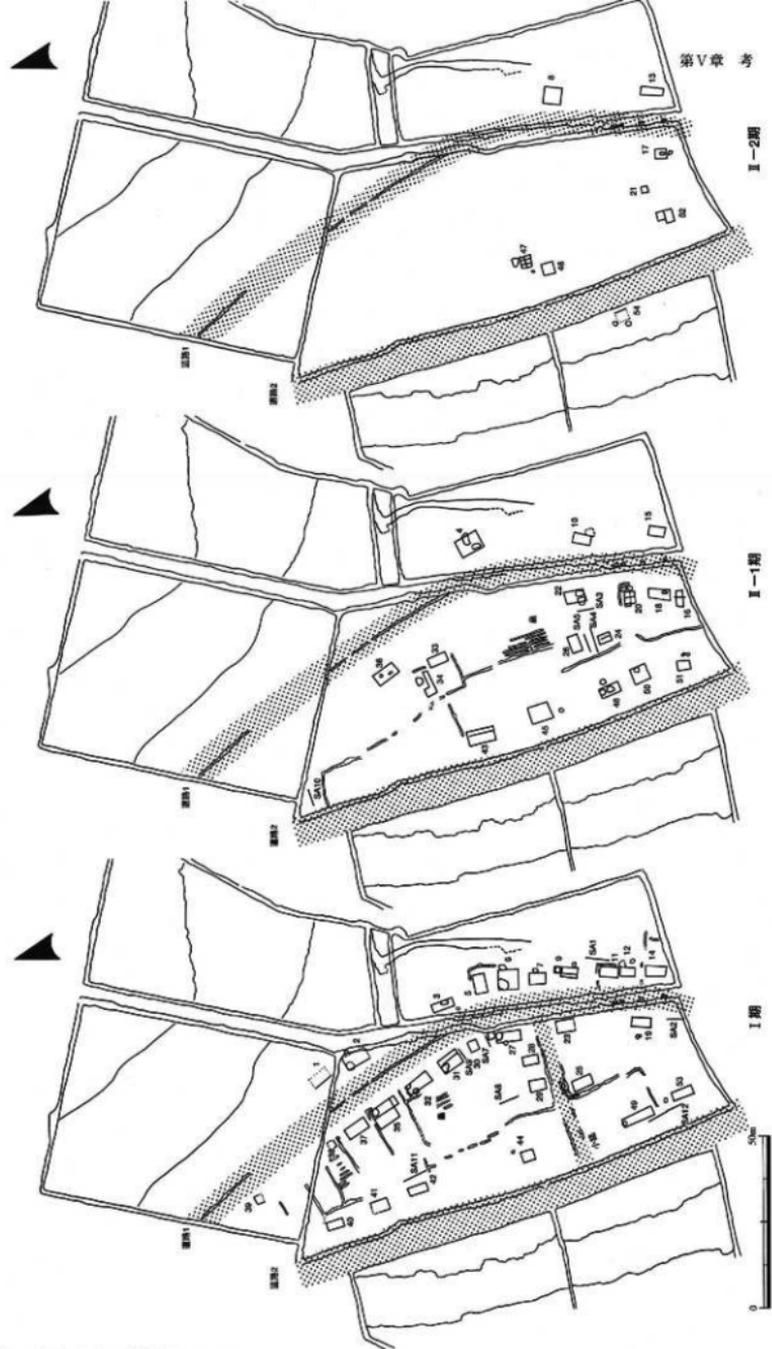
Ⅱ2期 Ⅱ2期の建物は8棟である。前段階までにみられたような配置はみられなくなる。また、SB8・SB46・SB47の3棟は、周辺の遺構との切り合い関係からⅠ期以前の建物の可能性も考えられる建物で、Ⅱ2期としているが、ここでは除外して考えたい。これらを除く5棟の建物は、Ⅱ1期よりさらに南側に集中する。建物は棟数も少なくなり、規模も小型化する。出土遺物から遺跡の存続時期は17世紀には降らず、Ⅱ2期は16世紀末頃と思われる。Ⅱ2期はⅡ1期の建物との間に切り合い関係が認められるが、大きな時期差とはならず16世紀第4四半期のうちで収まるものと思われる。Ⅰ・Ⅱ1期にみられたような配置はみられなくなり、町並みが「崩壊」していく段階で、Ⅱ2期の後、あまり時間を置かず近世面で検出されたような耕作地と化したと考えられる。

以上が各期の様相である。Ⅰ期に道路を軸として町並みが形成され、Ⅱ1期に「再編」、Ⅱ2期になって町並みは崩壊し、その後畜化する。町並みの形成から崩壊までは、16世紀第3四半期前後から第4四半期までの短期間に興っており、木舟城の城下町の形成と衰退の時期とも一致している。中世末から近世の城下町では、道路に面して棟が直交する配置をとる遺跡が多いが、当遺跡では道路に沿って建物の棟は並行に配置されている。道路に対して間口の狭い長方形の区画に分割され、道路に面して建物が並ぶ両側町の形態を取ると考えられ、近世城下町につながるものといえる³³。

C 建物の構造

つぎに、建物の構造についてみていきたい。建物の大半が掘立柱建物であるが、柱穴は極めて浅く、礎石・礎板・束柱痕などの土台基礎痕と考えられるものがある。しかしながら、判別が難しく本文では掘立柱建物として扱っており、ここでも掘立柱建物として扱うものとする。

なお、ここで用いる用語について定義しておく。建物として遺構確認しているのは、柱穴で囲まれた中核となる部分で、ここを中核屋と呼び、その外部を袖廊屋と呼称する。梁・桁については便宜上長軸を桁、短軸を梁とする。総柱構造とは梁行が2間以上あり、柱が葦盤目状に並ぶものを指し、それ以外のものを側柱構造とする。側柱構造をとるものうち、特に梁行1間のものを梁行1間構造と呼ぶものとする。竪穴状土坑は河西氏の分類³⁴があるが、ここでは建物の周囲で確認される一辺1m～2mほどの方形で、深さ10cm前後の浅い土坑を指す。楕円柱穴とは厳密には円形に近いものや、隅丸長方形のもの等があるが、長軸・短軸に差のあるものを総称して呼んでいる。

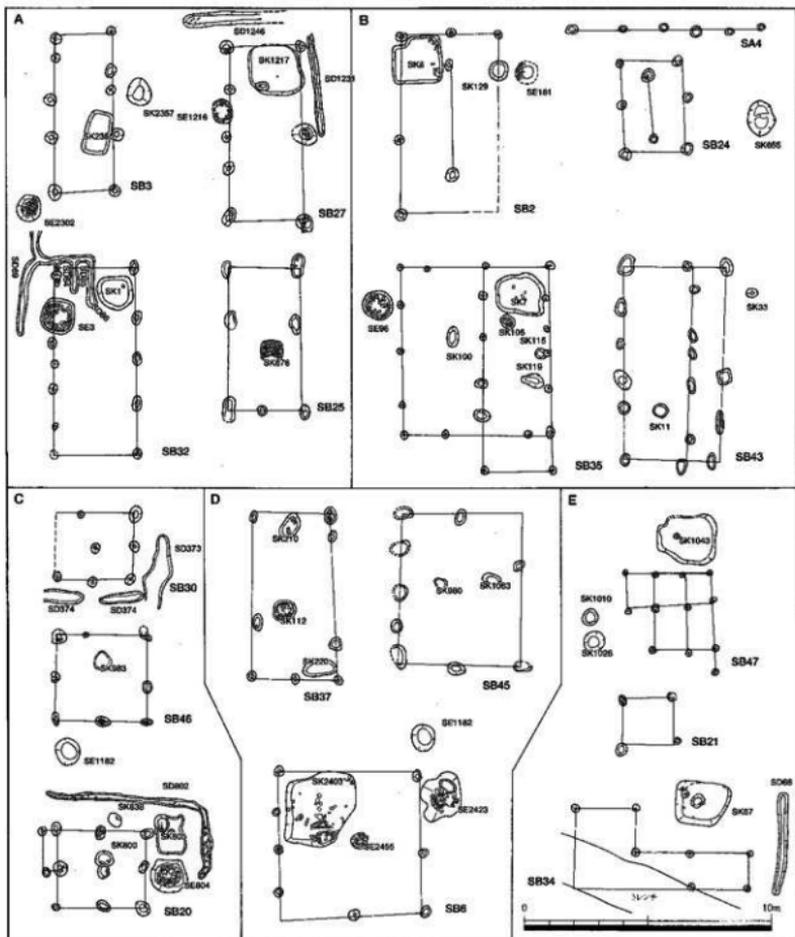


第173図 町並み変遷図

当遺跡では、54棟の建物が復元され、柱配置などからA～Eの5つのタイプに分けてみた。

Aタイプ 22例ある。いわゆる梁行1間構造の建物である。桁行の柱穴は柱間が不均等で梁方向で一致しないものも含む。中核屋部分は掘立柱を基本としているが、柱間が不均等なものは上台束柱状のものとの折衷型の可能性も考えられる。椽円柱穴を持つものもみられる。建物の内部または、隣接した位置に堅穴状土坑が伴い補助屋空間の存在が想定できる。

Bタイプ 9例ある。建物の中央に直線の柱列があり、側柱に小型で浅い柱穴がランダムに並ぶものである。中央の直線柱列は棟持柱列と考えられ、上屋を受ける棟持柱列のみが掘立柱で、左右の屋根を支える側柱の部分は礎石や土台などを用いていたと考える。構造的には棟持柱で上屋を受ける為、側柱のライン（梁間）が均等であれば桁方向の柱が揃わなくても、屋根を支えることは可能と思われる¹⁵。側柱は浅いものが多いため、削平などにより検出されない柱穴が多くあると思われる。このた



第174図 建物のタイプ

め、I字やL字状に並ぶ柱穴として検出されるものもあり、SB1・SB38・SB54はBタイプの可能性がある。これらの柱列には堅穴状土坑が伴い、土坑を含むような範囲で土台等が巡ると考えられる。楕円柱穴を持つものがみられる。

Cタイプ 6例ある。2間×2間のものである。小規模なものが多くみられる。2間×2間の部分が中核屋にあたり、柱列の外側に堅穴状土坑や井戸を伴うものがみられることから、補助屋空間の存在が想定される。他のタイプに比べて柱穴は大きく、深いものが多い。

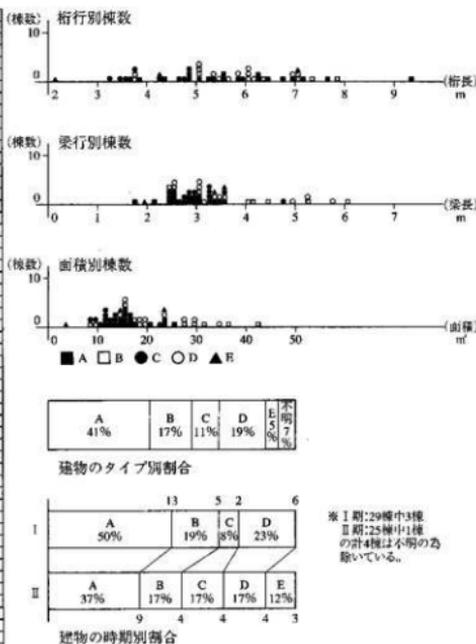
Dタイプ 10例ある。2間×2間以上のもので、桁行が2間以上あるもの。桁方向の柱数や、柱間は不均衡なものが多くみられる。中核屋の内側に堅穴状土坑が伴う例が多く、浅い溝があり根太などの土台を併用していると考えられるものとみられる。楕円柱穴をもつものがみられ、楕円は桁方向に長い配置を取る。

Eタイプ 3例ある。総柱形態を取り、柱穴は全て炭化物を混入する浅い皿状のもので、礎石抜取り痕・直置柱痕・土台基礎痕などの「痕跡」と考えられている[※]。Eタイプの建物はいずれもⅡ期になって現れることから、他のタイプに比べて後出的といえる。

規模の面では、①10㎡以下の小型、②10㎡～30㎡の中型、③30㎡以上の大型に分かれ、中型のものが80%で、平均平面積は17.58㎡である。各タイプとも、大きな差は認められず均質的であるが、Bタイプは大型のものが目立つ。これは、Bタイプが棟持柱+銅柱で建物(建物敷地)のほぼ全体を示しており、他のタイプ、特に小型の日立つCやAタイプは中核屋部分のみを示しているためと考えたい。例えばCタイプのSB20は11.20㎡であるが、堅穴状土坑SK805を含む範囲を建物敷地とすると約22.60㎡となり、大差がないとなる。県内では堅穴状土坑が建物内部に取り込まれる例は、中世前

建物	種類	タイプ	桁長(m)	棟行(m)	面積(㎡)	備考
1	I	B?	5.7			一本柱状
2	I	B	7.9	4.0	31.60	
3	I	A	8.4	2.4	20.16	
4	I	B	7.0	5.2	36.40	
5	I	D	5.8	3.3	19.14A?	
6	I	D	8.0	5.7	45.60	
7	I	A	5.0	3.2	16.00	
8	E2	D	6.2	5.2	32.24A?	
9	I	B	5.0	3.0	15.00	
10	B1	A	5.8	2.8	16.24	
11	I	A	5.7	3.0	17.10	
12	I	A	4.8	2.8	13.44	
13	B2	A	6.7	2.5	16.75	
14	I	D	8.0	3.0	24.00A?	
15	B1	A	4.7	3.7	17.44	
16	B1	A	4.8	3.7	17.76	
17	E2	C	3.4	2.8	9.52	
18	B1	A	8.2	2.8	22.96	
19	I	D	5.0	2.8	14.00A?	
20	B1	C	3.5	3.2	11.20	
21	E2	E	2.1	1.8	3.78	
22	B1	A	5.8	3.5	20.30	
23	I	D	5.4	2.8	15.12	
24	B1	D	3.7	2.4	8.88	
25	B1	A	5.8	2.8	16.24大板間柱穴	
26	B1	D	5.0	3.1	15.50A?	
27	I	A	7.1	2.1	14.91	
28	I	A	4.8	2.7	12.96	
29	B1	A	4.8	2.0	9.60大板間柱穴	
30	I	C	3.2	2.8	8.96	
31	I	B	6.3	4.4	27.72	
32	I	A	7.0	3.3	23.10	
33	B1	A	5.0	3.7	18.50	
34	B1	E	7.0	3.3	23.10	
35	I	B	7.0	5.0	35.00	
36	B1	A	8.8	3.4	29.92	
37	I	D	6.8	3.4	23.12	
38	I	B?	2.2~	2.2~	4.84-11.96	
39	I	A?	2.3~	2.1	4.83~	
40	I	A	4.8	2.4	11.52	
41	B	B	5.0	3.0	15.00	
42	I	A	5.0	2.4	12.00	
43	B1	B	7.8	4.1	31.98楕円柱穴	
44	I	C	3.8	3.2	12.32	
45	B1	D	4.1	4.5	18.45大板間柱穴	
46	B2	C	3.7	3.5	12.85	
47	B2	E	4.2	3.5	14.70I?	
48	B1	D	6.0	3.0	18.00土台併用?	
49	I	A	6.3	3.5	22.05	
50	B1	C	4.7	4.7	22.09大板間柱穴	
51	B1	A	3.8	2.8	10.64	
52	E2	B	3.7	2.0	7.40	
53	I	A	6.8	2.5	17.00	
54	B2	B?	3.7			一本柱状

第175図 建物一覧表及びタイプ・時期別グラフ



半からかなりの数があり、宮山市南中田D遺跡²⁷ではこの土坑について、炊事場・工房（作業場）として認識されている。福光町梅原胡摩堂遺跡²⁸では、県内において建物内部に作業場的な空間を土坑として取り入れる伝統があることが指摘されており、当遺跡においても、土坑の取り込みが継承されていると考えられる。また、当遺跡は城下町という性格上、道路に面した側にくる土坑には非常設的な「ミセ」²⁹としての機能も想定できよう。

柱間は梁方向で1.7m～3.5mと多様であるが、①2.4m～3.0m（7尺9寸～9尺9寸）②3.2m～3.5m（10尺5寸～11尺5寸）に集中する。特に、Aタイプの梁行1間のものは①2.4m～3.0mが主体となり、他のタイプのものよりも企画性が強い。

建物におけるタイプ別割合ではAタイプが41%で、時期別でもⅠ期50%、Ⅱ期37%と高率を占め、最も基本的な建物構造といえる。EタイプはⅡ期になってから出現するが、他のタイプの建物は各期を通して認められ、建物のタイプは多様なものがあつたと思われる。

D 県内の様相

県内の中世から近世の掘立柱建物の様相については、先述の梅原胡摩堂遺跡でまとめられている。ここでは、中世後半以降の特にAタイプの梁行1間構造の建物について、簡単にまとめてみたい。

15世紀代（後1段階） 14世紀代に盛興する総柱構造の建物は建物規模の縮小、桁柱間の短縮化、梁柱間の拡大化などの建物構造の変化がみられる。円形柱穴の側柱建物、一部で梁行1間構造の建物が目立ち始め、小屋組構造の変化により、母屋と下屋（庇）空間の明確な区別がなくなる新構造への移行期といえる。南中田D遺跡・梅原胡摩堂遺跡・上市町弓庄城跡³⁰などがある。

16世紀代（後2段階） 総柱構造の建物はほとんどみられなくなり、側柱構造の建物が主体となる。梁行1間構造の建物が顕著にみられるようになり、前段階からみられる新構造へ完全に移行した時期と考えられている。柱穴の規模が拡大し、大型の円形柱穴、楕円形のものが出現する。楕円柱穴の大部分は梁行1間構造の建物で構成される。また、土台や礎石の併用が想定される建物が出現する。梅原胡摩堂遺跡・弓庄城跡・福光町香城寺遺跡³¹・姉中町新町Ⅱ遺跡³²などがある。

16世紀末～17世紀（後3段階） 前段階よりも企画性の強い梁行1間構造・楕円柱穴の建物が顕著になる。梅原胡摩堂遺跡・砺波市増山城遺跡³³があり、17～18世紀代のものとしては福岡町江尻遺跡³⁴に例がある。

当遺跡は梅原胡摩堂遺跡の後2段階の時期にあたり、梁行1間構造（Aタイプ）の建物が主体となっており、これら一連の流れの中に位置づけて考えることができよう。

E 開群大滝遺跡の建物

当遺跡では梁行1間構造の建物は、Ⅰ期の計画的な町並み形成時から建物構造の主体を占めている。構造的には県内の梁行1間構造の建物と、広い梁柱間をもつ点、堅穴状土坑が建物の内外に伴う点など共通する点を挙げることができる。一方で、柱形態は小型で円形のものが主で、大型柱穴や楕円柱穴は従という関係にある。また、楕円柱穴をもつ建物は梁行1間構造のAタイプのみでなく、B・C・Dの各タイプにも認められる。このことは、当遺跡が梁行1間構造および柱穴規模拡大・楕円柱穴化への過渡期に位置しているためと考えられよう。

また、当遺跡の建物の多くは、基本的には中核屋の部分を掘立柱による側柱構造としているが、礎石や土台などを併用していると考えられるものが認められる。遺構として確認できるパターンは複数あり、礎石や土台の取り込み方は多様であつたと思われる。さらに少数例ではあるが、Eタイプでは礎石・土台建ての建物も認められる。礎石を用いる「石場建て」や土台を用いる建物については、東

北地方では17世紀代になってからで、17世紀初頭頃では城郭内や、館や屋敷を持つ土豪の住居のごく一部でみられるに過ぎないという^{注15}。もちろん、石場建ての普及には地域や階層、住居規模などにより相当の差があったと思われる。県内においても石場建て（礎石建物）が検出される例は城館や寺院などの特殊なものに限定されているが、当遺跡と同じ木舟城の城下町である福岡町石名木舟遺跡^{注16}でも16世紀代で礎石建物が確認されている。城下町という特殊性から、一般の集落よりも礎石建物の導入が早かった可能性が考えられる。

さらに、当遺跡では、建物構造が新構造へ移行していく現象としての梁行1間構造・楕円柱穴の導入や、掘立柱建物への礎石・土台の併用など、建物の構造上の企画性が強くみられる。これは、ある一定の建築技術の元で建築されたものと考えられ、町並み（城下町）の形成時から用いられている。梁行1間構造・楕円柱穴の特殊性については、梅原胡摩堂遺跡で支配者・前山家の影響と一定の大工集団の関与が指摘されており^{注17}、当遺跡においても大工集団の存在が想定できよう。中世末以降には坪傾地人工や御用大工といった集団が統治者の下、屋敷地を与えられて城や城下町の建築に従事していたという。県内でも、水見の大窪大工をはじめ、井波・城端・富山・高岡にこのような大工集団がいたことがわかっている^{注18}。当遺跡に関与していたであろう大工集団は梅原胡摩堂遺跡や増山遺跡の集団と同一とはいえなくても、技術的に極めて近いものがあり、密接な関係にある大工集団の可能性があると考えられる。

以上、開群大滝遺跡の町並みについて、建物群の変遷と、建物構造について検討してみた。開群大滝遺跡では遺構としての建物のあり方は多様であるが、梁行1間構造及び掘立柱建物への土台・礎石の併用として促えられ、中世後半における建物構造の変化の中で過渡的な様相として位置づけることができよう。また、当遺跡は「城下町」としての町並みの形成・再編・衰退という一連の流れを追うことができる。「貴船城古誌」からは鍛冶屋町の一部に相当すると思われ、城の周囲に自然地形を考慮して形成された城下町の一部を知ることのできる貴重な遺跡といえる。建築学的な視点や文献からの解釈など多方面からの検証が必要と思われる、今後の課題としていきたい。（二鳥道子）

注1 木舟城跡保存会 1993 『貴船城古誌』 森田伸園 1952 『越中志概』 富山新聞社
略年表は『貴船城古誌』によっている。

注2 福岡町役場 1969 『福岡町史』

「矢部の日尾に陣営を置き、大竹町に火を放ちたり」とある。大竹町は現、大滝のこと。金沢藩の慶安2年（1649）の日記に「大滝は往古大竹と書きあり」とある。また、開群（開発）は水原半園に木舟の人が開発して移り住み「開発村」と名付けたといひ、当時は城下町として栄えていたと思われる。

坪谷 嘉平次他 1914 『北越太平記』 戦後史料叢書出版部

水林元年戊午二月十九日三月影定殿中へ出陣富山増山放牛漆木船邊放火。（略）あり、木舟城の周辺は放火されている。

注3 下井幹雄 1994 『町制・屋敷割・町屋 近世都市空間成立過程に関する一考察』 『年報 都市史研究 2』 都市史研究会

注4 河西健二 1993 『越中の様相』 『中世北陸の家・屋敷・暮らし』 北陸中世十師研究会

注5 伊藤彰爾 1958 『中世住居史』 東京大学出版会 宮澤哲士他『講座・日本技術の社会史 第七巻 建築』 日本評論社

注6 河西健二 1994 『雑記 建物遺構』 『歴史文化財年報(5)』 財団法人富山県文化振興財団河内文化財調査事務所

注7 富山県埋蔵文化財センター 1990 『南中田1遺跡発掘調査報告書』

注8 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1994 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』

注9 注3に同じ。

注10 上市町教育委員会 1981～1985 『門庄城跡 第1次～第5次緊急発掘調査概要』

注11 福光町教育委員会 1982 『香城寺遺跡の調査』

注12 錦中町教育委員会 1986 『新町2遺跡の調査』

注13 砺波市教育委員会・砺波市郷土資料館 1991 『増山城跡調査報告書』

注14 三鳥道子 1996 『江尻遺跡の建物について』 『埋蔵文化財調査概要 平成7年度』 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注15 中野和夫 1991 『東北民家史研究』 中央公論美術出版

注16 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1995 『埋蔵文化財年報(6)』

注17 河西健二 1994 『第IV章まとめ 3中世末から近世の建物』 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 本文、D票内の様相については、河内氏の段階設定に従っている。

注18 高岡 保・橋本方雄 1983 『第八町職人と商売』、大工』 『富山県史 通史編IV近世下』 富山県

2 開群大滝遺跡の中世土器・陶磁器について

A 中世土器・陶磁器の組成

中世の土器・陶磁器には、中世土師器、瀬戸美濃、珠洲、白磁、青磁、染付、越前、褐釉陶器、朝鮮陶器がある。出土総数は遺構、包含層全てを含めても僅か548片である。

面積当たりの出土点数は約38m²に1片の割合である。量は中世後半は前半に比べて減少傾向にあるけれども、当遺跡の場合は極端に少ない。

土器・陶磁器の出土状況は遺構及び周辺包含層から散漫に出土し、顕著な濃淡は認められない(第176図)。但し、調査区西側のE・F区大溝以西は遺構は皆無であるが珠洲が散発的に広範囲から出土している。両区は表十直下が砂礫氾濫層であり、遺物はこの層中に含まれ、器壁が摩滅したものが多いことから二次堆積の遺物としておきたい。

種類の構成比率は中世土師器、瀬戸美濃、珠洲の3種類がそれぞれ39.1~19.5%を占め、白磁、青磁、染付、越前が2~5%台、褐釉陶器、朝鮮陶器は1%にも満たず極僅かである。中世土師器などの国産品は470片、白磁などの輸入品は78片で、比率は国産品は85.8%、輸入品が14.2%になる。輸入品の比率が高いが、国産品とりわけ中世土師器の低比率が招いた現象である。

中世土師器皿は214片で、比率は39.1%と最も高い。しかし、白鳥城(16世紀)の77.8%⁸¹、禮ノ城(15~16世紀)の87.4%⁸²に比べて極端に低い。更に、一乗谷朝倉氏遺跡で最も比率の低い町屋の比率50%⁸³よりさらに低い数値である。土師器皿の用途は灯明皿とともに儀式の酒杯として用いられる。格の高い遺跡ほど酒杯としての比率が高くなり、土器に占める比率も高くなることが指摘されている⁸⁴。当遺跡は最も格の低い一般集落になろう。当遺跡出土の皿は口径11~12cmの中型の法量が圧倒的に多く、13cmを越える法量は極僅かである。大型品は格の高い遺跡ほど増加傾向にあり、遺跡の性格を小映する。皿の中で、口縁部破片、体部破片に煤付着物が付くものが43片で20.1%になる。しかし、灯明皿に使用しても必ずしも全面に煤が付くものでないから、灯明皿の比率は更に高くなるであろう。安田城では38.2%⁸⁵、榎ノ城は10.2%が灯明皿である。

瀬戸美濃は136片で全体の24.8%を占め、比率は高い。器種は天目茶碗、灰釉・鉄釉丸皿、ひだ皿、水滴、香炉などがあるが、天目の量は比は79片、67.5%に達し突出している。更に、灰釉丸皿は22片で18.8%を占め、2器種で瀬戸美濃製品の9割近くを占める。鉄釉丸皿、ひだ皿、水滴、香炉の比率は1~6%で極僅かであり、器種による著しい偏りが認められる。

珠洲は107片で19.5%を占める。しかし、前述したようにE・F区出土遺物を二次堆積遺物とした場合、60片の出土量に減少する。器種は壺、壺、搦鉢があり、比率は壺が90片、83.3%と圧倒的。壺は7片で6.5%、搦鉢は11片で10.2%である。珠洲には明らかに古い型式の遺物も含まれており、伝世品と混入品が含まれている。

越前は13片で比率は僅か2.4%である。器種は壺が9片、69.2%、土師質の搦鉢が3片、23.1%、小壺が1片、7.7%である。

染付は32片で全体の比率は5.8%である。器種には碗、皿、盆があり、比率は碗が61.5%、皿が26.9%、盆が11.5%である。

白磁は28片が出土し、比率は5.1%である。器種は1点のみ杯で、他は全て皿である。

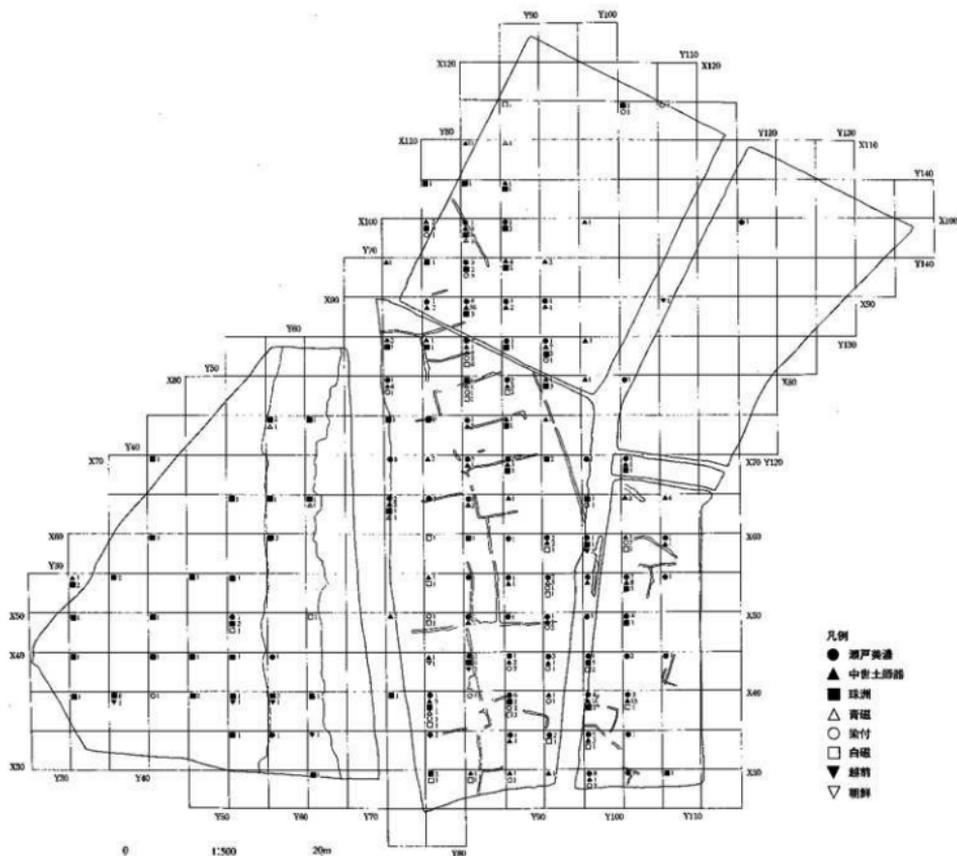
青磁は15片で比率は2.7%である。器種は碗と桜花皿で比率は63.6%、36.4%を占める。

用途別比率は食膳具は390片で74.0%、調理具は14片で2.6%、貯蔵具は117片で、22.2%、その他が6

片1.1%になる。食膳具の中では、中世土師器とそれ以外の比率は54.9%と45.1%で拮抗した数値になり、また、中世土師器を除いた食膳具の全体比率は56.2%まで下がるがまだ高い比率である。この数値の高さには瀬戸美濃の比率の高さに起因する。

食膳具での比率は中世土師器54.9%、瀬戸美濃28.5%、白磁7.2%、染付6.7%、青磁2.8%をそれぞれ占め、中世土師器の低比率と瀬戸美濃の高比率が対照的である。また、国産品の比率が83.3%を占める。

- 注1 宇野隆夫他 1991 「白鳥城跡」『城館遺跡出土の土器・陶磁器』北陸中世土器研究会
 注2 宇野隆夫他 1991 「横ノ城跡」『城館遺跡出土の土器・陶磁器』北陸中世土器研究会
 注3 宝珍伸一郎 1997 「中世土器・陶磁器の組成について」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
 注4 宇野隆夫 1997 「越中における陶磁器の流通と組成」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
 注5 宇野隆夫 1997 「越中における陶磁器の流通と組成」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会



第176図 グリット別出土遺物

B 中世土師器皿

中世土師器皿の出土量は少なく、また、遺構出土の遺物も少ないことから当遺跡のみでは遺物の変遷を掴むことは難しい。隣接する石名田木舟遺跡出土遺物を参考に論考する。石名田木舟遺跡は木舟城の城下の一角をなし、中世全般の遺物が出土している。その中でも16世紀初頭のF2・F3地区、16世紀中頃から後半のB2地区に良好な資料がある。但し、当遺跡の出土遺物は現在整理中であり、概要報告資料を用いる。概要に図示されている資料は多くないため法量等に偏りがあるかもしれないがお許し願いたい。また、16世紀末頃の遺物は周辺域には良好な資料が抽出できないため、地域が異なるが富山市白鳥城出土遺物を当てる(第177図)。

石名田木舟遺跡F2・F3地区は木舟城の西側約500mの距離に位置し、堀で囲まれた屋敷跡が検出されている。F2地区SD6やF3地区SD30は堀の一角をなす。このSD6から「長享二年」(1488年)紀年銘木簡と共に中世土師器が出土している。F3地区のSD30とSD6とは同一溝で大量の中世土師器が出土している。木簡の廃棄時期や木簡と土師器との関係に付いては今後詳細な検討が必要であるが、ここでは中世土師器皿の時期は15世紀末から16世紀初頭の遺物としておく。なお、当地区の遺構群は16世紀前半で終焉を迎える⁸¹。

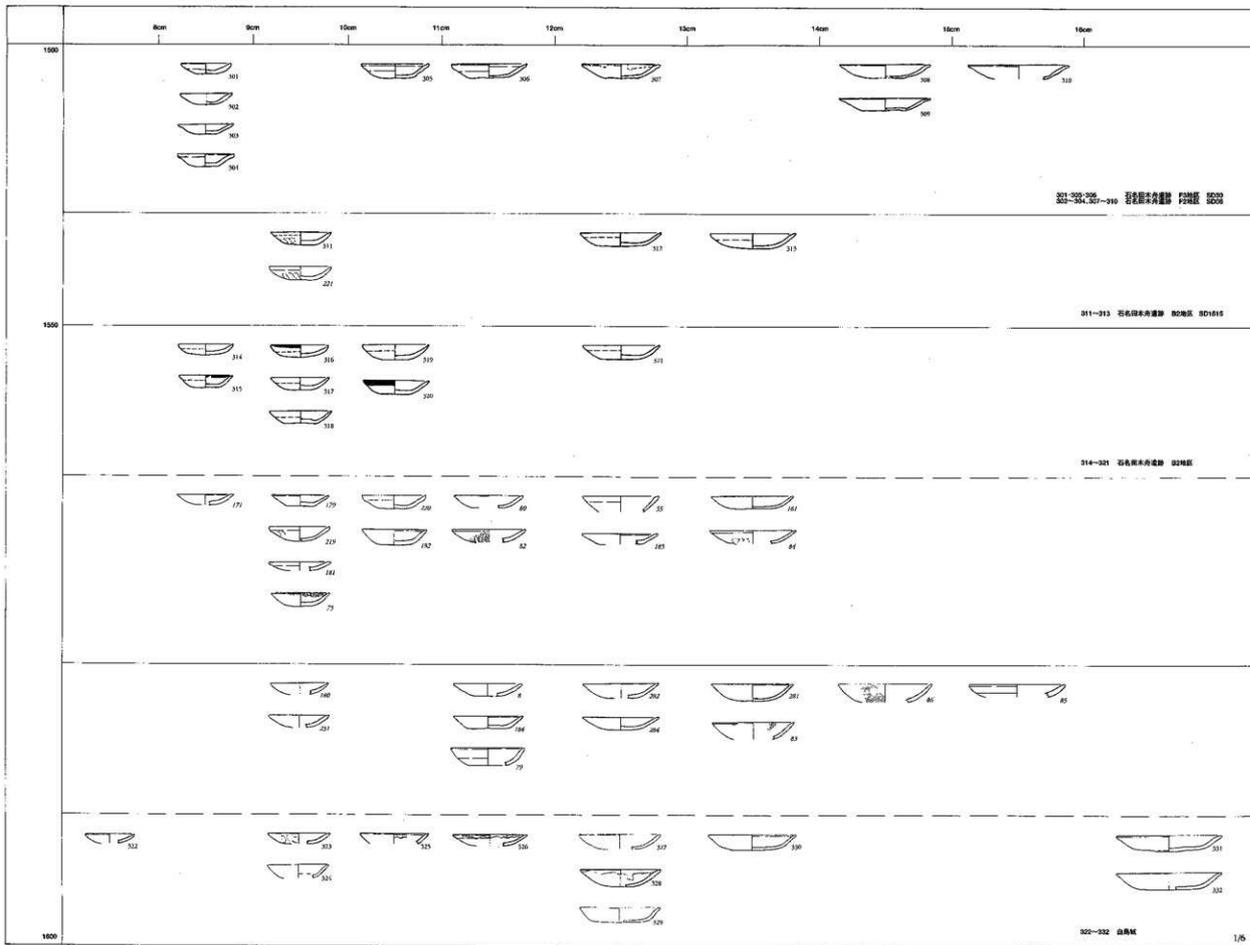
B2地区は木舟城の北側に位置し、3面の遺構構築面が確認されている。最下層の出土遺物は16世紀中頃に近い前半代と推定する。また、終焉は16世紀末頃である。図示されている土師器皿は一括出土品ではないが、様相は比較的単純であり、大きな時期差はなく、16世紀第2四半期から第3四半期の土器様相として捉える⁸²。開群大滝遺跡と並行する時期である。

白鳥城は文献では大正13年に豊田秀吉が富山城を攻めるために築いた城とされる。遺物は各調査区から散発的に出土し、一括遺物ではないが土師器皿の様相は比較的単純であり、16世紀第4四半期頃に比定される短期間の遺物である⁸³。

16世紀初頭の中世土師器皿の器形には15世紀前半期の底部を丸底風に仕上げ、口縁部外面を強くヨコナデする器形に系譜が辿れる在来系のAタイプと京都系の口縁が強く外反するBタイプがある。但し、成形や調整は同じであり、分離の難しいものもある。口径8~9cmの小型品には両タイプが認められる。Aタイプは体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部と外面をヨコナデし端部を軽く内側に巻き込む(301)。Bタイプの体部は外反し、さらに口縁下半で外傾度を増す。口縁端部と外面に弱いヨコナデを施し、端部を軽く内側に巻き込む(302・303)。端部には丸く面をもつもの(304)も少量ある。体部から口縁部の成形は指押さえて行われ、立ち上がりの傾斜にはバラエティに富む。また、口縁部内面に屈曲をもつ。10cm以上の中型品、大型品はBタイプのみで、口縁部下半外面に強い1条のヨコナデを施す。法量は8~9cm台(301~304)、10cm台(305)、11cm後半~12cm台(306・307)、14cm台(308・309)、15cm台(310)、それ以上の6法量程度が想定されるが主体になるのは8~9cm台、12cm台、14cm台の3法量である。8~9cmの法量の中心は8cm台である。両タイプの胎土には海綿骨針を含み、焼成も似る事から産地は同一であろう。またこの時期には、ロクロ成形の土師器皿が僅かに混じる。開群大滝遺跡出土ロクロ土師器165は当該期であろう。

この頃の遺物には高岡市国府間遺跡SK11があり、Bタイプのみが一括出土している⁸⁴。法量は8cm、10cm、12cm、13~14cm台の4法量があり様相は似る。

16世紀第2四半期の土師器皿は抽出できなかった。恐らく第1四半期とは大きな変化がないのであろう。但し、石名田木舟遺跡B2地区SD1515出土土師器皿(311~313)、開群大滝遺跡SX4018出土の221は当該期の新しい様相をもつ。311・221ともAタイプで9cm台の最小法量である。口縁端部や



第177図 16世紀中世土師器血編年

外面に弱いヨコナデを施す。この頃に小法量の中心は9cm台に移る可能性が高い。312・313は12cm台、13cm台の中型品でBタイプである。体部と口縁部の境の屈曲は一段と不明瞭で直線的である。口縁部外面には幅が狭く浅いヨコナデを施す。口縁端部は軽く内側に巻き込むもの(313)、形骸化して僅かな窪みとなる(312)がある。

A、B両タイプとも底部の比率が増し、底部と体部の境が不明瞭になる。体部の外傾度や口縁下半の屈曲が弱くなり、口縁下半の屈曲の意味合いが薄れると共に、内面の後も目立たなくなる。

第3四半期の土師器皿には石名田木舟遺跡B2出土遺物(314~321)、開群大滝遺跡出土遺物(171・179など)がある。

開群大滝遺跡出土遺物の8cm~9cm台にはA・B両タイプがあるが、主体は体部から直線的に立ち上がる折衷型で口縁端部は尖り気味になる。端部の巻き込みは形骸化する。口縁部外面のヨコナデは殆ど施さない。また、施される個体でも、弱くて部分的なヨコナデであるため不明瞭である。底部と体部の境は丸味をもち、不明瞭なものが一般的であるが、境が明瞭なもの(182)もある。

219・220は他とは胎土が異なり、粘土質で、海綿骨針を含まない。また、219は器形も異なり口縁端部に面をもち、ヨコナデを施す。他のものとは産地が異なるのであろう。

中型品、大型品はBタイプであるが、形態の特徴は前述した小型品と同様である。口縁部外面のヨコナデは中型品や大型品でも雑になり、部分的である。法量は9cmに中心があるもの、10cm後半~11cm前半台、11cm後半~12cm台、13cm台の4法量がある。

第4四半期の白鳥城出土遺物には7cm台の小法量から9cm台、10~11cm台、12cm後半~13cm台、16cm台の5法量程度がある(322~332)。全体的に底部に丸味があり体部との境は不明瞭である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外傾度を増す。端部は尖り気味に収める。但し、底部と体部の境が比較的明瞭なもの(329)も僅かにある。口縁部外面のヨコナデの状況や端部の調整は実見していないので不明である。

当該期の開群大滝遺跡出土遺物(180・231など)には9cm台、10cm後半~11cm前半台、11cm後半~12cm台、13cm台、14cm後半~15cm台の5法量がある。

9cm台にはAタイプの180と折衷型の231がある。口縁端部は尖り気味(180)、軽く内側に巻き込む(231)があり、外面にはヨコナデは施されない。11cm台の中型品のは器形はバラエティに富む(8・184・79)。12cm台は体部が直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外傾度を増す(282・284)。284の口縁部外面には弱いヨコナデを施す。大型品の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部外面は未調整のもの(86)、比較的明瞭なヨコナデを施すもの(85)がある。85は異質で器壁が厚い。

このように16世紀代の土師器皿の変遷は、初頭には比較的明瞭であったA・Bタイプの器形が中頃前後に口縁部の外傾度の弱い折衷型に移行し始め、後半代には主体になる。また、口縁部外面のヨコナデ調整は簡略化の方向に進む。法量は小型品は徐々に大型化し、中頃には10cm台も定量化する。

注1 島田美佐子1995 「石名田木舟遺跡 F2地区中世面」『埋蔵文化財年報(6)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

中川道子 1995 「石名田木舟遺跡 F3地区中世面」『埋蔵文化財年報(6)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注2 酒井兼洋・柴口貞澄 1995 「石名田木舟遺跡 B2地区出土遺物」『埋蔵文化財年報(6)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注3 古川知明 1984 「白鳥城跡発掘調査概要(Ⅱ)」富山市教育委員会

注4 山口辰一 1996 「越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ」高岡市教育委員会

C 陶磁器

陶磁器には国産の瀬戸美濃・珠洲・越前、輸入品の白磁・青磁・染付・褐軸陶器・朝鮮陶器がある。量比については前述した様に瀬戸美濃が最も多く、白磁、染付が一定量を占め、青磁は減少気味である。これらは総体的には16世紀代の特徴を現す。また、珠洲の量比は目立つけけれども、時期は長期に亘っており混入品が多いのであろう。

瀬戸美濃の器種は天日茶碗が大多数を占める。しかし、全形を知り得るものは296の1個体のみである。底部は削り出し輪高台で体部は直線的に開き、口唇部は直立し、口縁端部は外反する。器高は6.1cmと扁平で、体部下半は露胎である。また、大型破片の65・66なども同様の特徴を有し、藤沢大窯編年^{注1}の第2ないしは第3段階と推定される。230のひだ皿は第3段階に出現するとされている。99は底部内面に印花文が押圧された丸皿1類の中製品で第1段階か第2段階であろう。また、188の灰軸丸皿は1類の小型品で第2段階の遺物であろう。1は鉄軸内禿皿で削り込み高台をもち、底部内外面の軸は拭き取る。焼成は窯道具を使用せず、直接重ね焼きを行う。この特徴をもつ遺物は瀬戸美濃製品から除外する意見もある。

瀬戸美濃は大窯第1段階から第3段階までの遺物が含まれ、第2から第3段階のものが多い。年代は、15世紀末～16世紀末になる。

珠洲は大別すると古岡編年^{注2}Ⅰ・Ⅱ期頃の遺物とⅤ・Ⅵ期頃の遺物に分かれる。前者は遺構内からも出土しているが小破片で復元できるものはない。全て混入品であろう。Ⅴ・Ⅵ期の遺物の中の9は広範囲から破片が出土し、また、接合ができることから伝世されて使用された可能性が高い。

白磁の器種は1点の杯を除くと全て皿で、小野編年^{注3}の皿C群に属し、15世紀後半～16世紀第3四半期頃までの遺物である。233の菊皿は白磁D群に属し、やや後出する群とされている。

青磁には碗と後花皿がある。碗はへら掻き、線掻きの巡芥文をもつ碗で、169はやや広めの連弁が描かれる。上田編年^{注4}の龍泉窯系碗B4類に該当し、15世紀後半～16世紀中頃に位置付けられる。後花皿193は文様帯が狭く後出的様相を持つ。

染付は全形を知り得る個体はないが、文様構成から分類すると、皿113・195・293は小野編年のB1群、112は皿C群、また、176・251は皿B2群に当てはまる。111・177・242の碗は碗E群である。同伴関係は皿B1群と皿C群、皿B2群と碗E群が伴い、前者は15世紀後半～16世紀前半、後者は16世紀中頃～後半の年代が与えられている。この他にやや異質な染付として197・16がある。197は浅めの碗で器壁が厚く、文様が稚拙で軸垂れが見られる。16は胎土が陶質で黄色味を帯びた釉がかかる。上山編年^{注5}のB群、C群に該当し、16世紀第4四半期以降の年代が考えられる。

白磁との同伴関係は皿B1・C群には白磁皿C群が、皿B2群、碗Eには皿D群が伴うとされる。朝鮮陶器の294は、いわゆる舟徳利と呼ばれるもので器壁は薄く仕上げられている。

このように瀬戸美濃・白磁・青磁・染付の年代は15世紀後半～16世紀末までの遺物である。

(池野正男)

注1 藤沢良祐 1993 「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史編四

注2 古岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館

注3 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2

注4 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2

注5 上田秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究』Ⅰ 関西近世考古学研究会

3 木製品からみた開群大滝遺跡

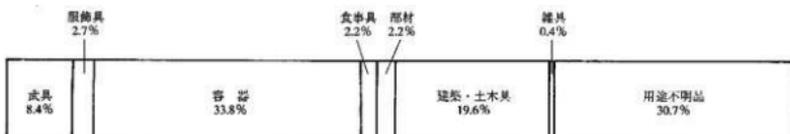
A はじめに

開群大滝遺跡から出土した遺物は、その調査面積に比較すると非常に少なく、当然のように木製品についても同様である。しかしその一方で、当遺跡の特徴を如実に表すと考えられる遺物もあることから、前章で取り上げた遺物のうち、主要なものについて製品ごとに検討する。

B 製品と樹種

ここで取り上げる木製品は遺構・包含層出土の遺存状態のよいものを対象としている。まず、すべての製品を『木器集成図録 近畿古代編』¹⁾を参考にして、武器、服飾具、容器²⁾、食事具、部材、建築・土木具、雑具、用途不明品といった機能上の分類を中心にして、便宜的に分類をおこなった。

出土した製品の機能別分類による構成比は、第178図に示した。漆器碗・曲物などの容器が全体の約3分の1を占め、次いで柱・杭といった建築・土木具、鏡（小札）の武器、服飾具、食事具の順になっている。生活用具は主体であるが、武器の比率が高いことが当遺跡の特に注目する点であると考えられる。また、第22表には元興寺文化財研究所による樹種鑑定結果を製品別に示している³⁾。使用してい



第178図 機能別構成比

分類	種類	樹 種									
		スギ	ヒノキ科	マツ属	ケヤキ	ブナ	ヤナギ	ばら科	ニガキ	ネムノキ	コナラ属
武器	鏡										
	小札										
服飾具	襦										
	下駄			○				○		○	
容 器	漆器釜				○						
	漆器碗				○		○				
	漆器皿				○						
	漆器折敷				○						
	曲物		○								
	輪	○									
	手桶		○		○						
食 事 具	円形板	○	○								
	楕(箱)		○								
雑 具	しゃもじ		○								
	箸										
部 材	加工板										
	脚										
建築・土木具	柱								○	○	
	建築材			○							
	板										○
雑 具	杭										
	柄										
用途不明品	加工材		○								
	加工板	○		○							
	加工棒										
	加工木										

第22表 機能別使用樹種

る樹種は針葉樹が主体であり、最も多用されているのはヒノキである。これに対し、広葉樹は使用する樹種は多いが、使用頻度は低い。これは当遺跡出土の土器・陶磁器の時期が16世紀後半を主体としていることからみて、全国的な傾向⁴⁴に沿ったものであるといえる。ただ漆器（椀・皿・蓋）に限っては、広葉樹のみの使用で、使用された樹種は高級品に用いられるケヤキが22.2%、ブナが77.8%であり、圧倒的にブナの使用頻度が高い。しかし、樹種鑑定をおこなった製品が少ないこともあり、この結果が全容を示しているとはいえず、あくまでも当遺跡の傾向を表すものと考えている。

C 主な遺物の特徴

(1) 漆器

出土した漆器には椀・皿・蓋・折敷などがある。ここでは漆器の形態を分類し、一括遺物として扱える遺構出土のものについて、その組成をみていきたい。

漆器は器形から椀をA類、皿をB類、蓋をC類に大別し、さらにそれぞれを形態的特徴から第24表のように細別した。また、A類・B類の高台形態については、第23表・第181図のとおり分類し、それぞれ組み合わせで表現し、漆器計測表の分類欄に記号で示した。しかし、全体の器形が明らかなものとはごく僅かであるため、漆器椀の各部分の計測値等から器形を推定したものもある。

器形ではA類が全体の84.6%を占め、B・C類がそれぞれ7.7%となる。上塗色では総赤色が内面赤色より多く、総赤色が19.2%、内面赤色を含めた赤色系漆器は30.8%、黒色系漆器は69.2%で、それぞれA類が占める割合は前者で75%、後者で88.9%となり、上塗色を問わず椀が圧倒的に多い。A類の形態分類については、第179図～第180図に示したとおりで、客観的な数値として表すことが可能なものは少ないが、口径による大小、体部高における高低、高台に高低差があることが指摘できる。また、上塗色と樹種との関係では、総赤色のものにはケヤキ、内面赤色のものにブナが使用されているのに対し、黒色系漆器ではC類にケヤキが使用されている以外はすべてブナである。また、漆絵の意匠は明確なものが少ないが、草花文、扇文、家紋⁴⁵などが簡素に描かれている。内面赤色系漆器の上塗色と下地分類の関係については、四柳嘉章氏による塗膜分析結果⁴⁵から、114が地の粉（鉱物粒子）漆下地の上質品であり、2・24は漆下地で上塗りが朱漆であることが判明している。

組成については、一括出土遺物として取り扱えるものが第26表のとおり6例あり、漆器が複数出土している例は4例である。以下に各遺構ごとの特徴を簡単にまとめるが、各遺物の詳細については第IV章を参照していただきたい。

a	バタ高台
b	高台高が低く、内面の削りが浅い
c	高台高が高く、内面の削りが浅い
d	高台高が高く、内面の削りが深い

第23表 高台の形態分類

A	I	高台脇から腰部が丸みをもって胴部に立ち上がり、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる椀
	II	高台脇から直線的に胴部に立ち上がり、口縁部が外上方に開く椀
	III	高台脇から直線的に胴部に立ち上がり、口縁部が内湾する椀
B	I	高台脇から腰部が丸みをもって胴部に立ち上がり、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる皿
	II	高台脇から腰部が緩やかにカーブしながら胴部に立ち上がり、口縁部が外反する皿
C	I	頂部から丸みをもって屈曲する蓋
	II	頂部から稜をもって屈曲する蓋

第24表 漆器形態分類

SK 8 出土の漆器は赤色系 1 点と黒色系 3 点で、4 と 5 は同じ文様をもつ。4 は体部の屈曲が非常に強いが、土圧による変形と考えられる。5 は底部のみの破片であるため形態分類は困難であるが、底部厚が薄いことから、高台の形態分類 b の可能性が高い。供伴遺物には直径 8.1cm の円形板が出土している。

SK 2403 出土の漆器には赤色系 2 点、黒色系 3 点がある。黒色系の 21 は漆がかなり剥落しているが、25 と同じ文様をもつ可能性が高く、口径差がみられる。赤色系のものには A I c 類 (24) と B II 類 (23) がある¹⁹⁾。24 はその形態から四脚編年¹⁸⁾ IX 期 3 段階 (16 世紀後半) と考えられ、供伴する瀬戸美濃の天目茶碗 (20) の時期とも一致する。他に木製品も多数出土しているが、最も特徴的な遺物として鍔 (小札) がある。

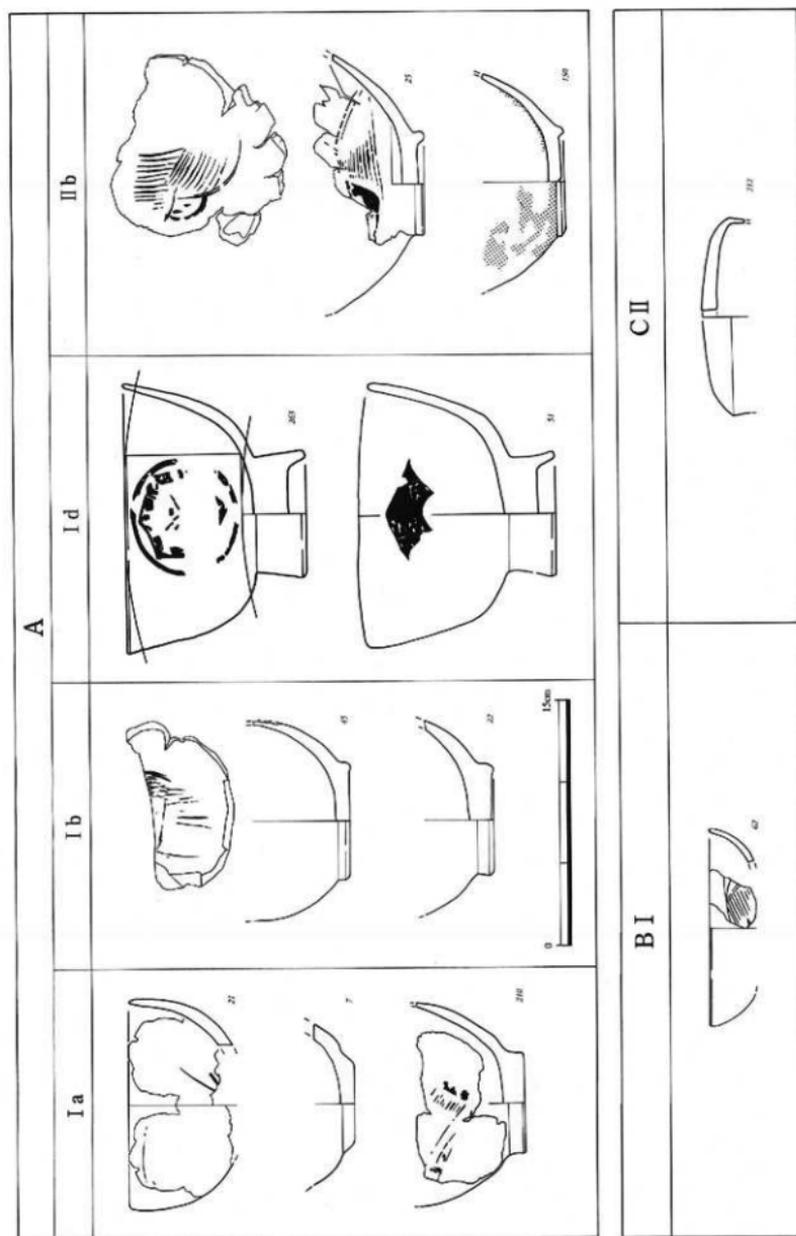
SE 2423 出土の漆器は赤色系 1 点、黒色系 1 点である。44 は口径 16.2cm を測る大振りの椀であり、45 は口縁部が残存していないので口径は不明であるが、体部径から 44 より小型であると推測されるものである。

SE 2094 出土の漆器は黒色系 2 点である。62 は口径 12.0cm を測り、B I 類と考えられるのに対し、67 は口径が不明ではあるが、体部径・体部高からみて、深い大型の椀であると推測される。供伴遺物には遺物下駄がある。

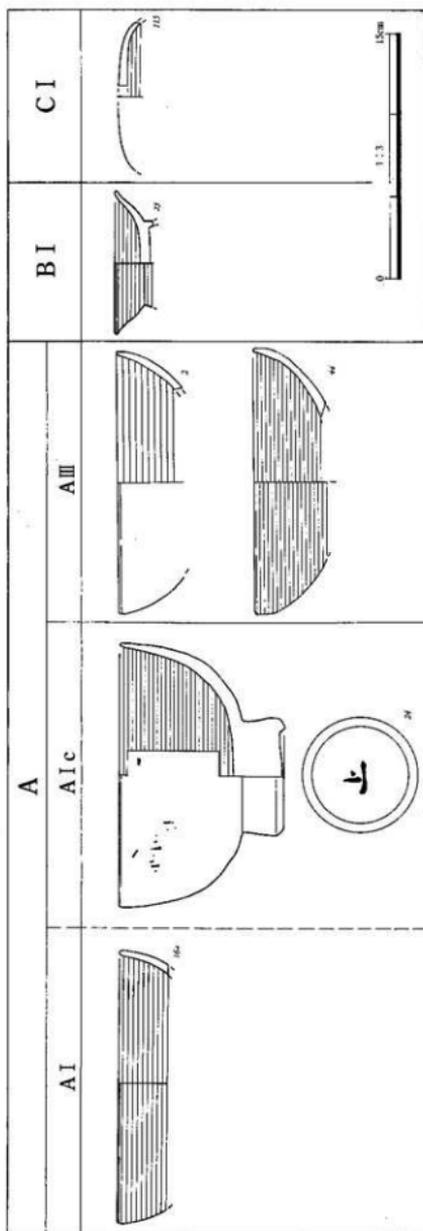
以上から漆器の組成については、SK 8・SK 2403・SE 2423 で赤色系と黒色系の組み合わせがみられる他、SK 8 では同じ文様をもちながら口径に大小があること、SK 2403 では皿と口径差がある椀とが組み合わせること、SE 2423・SE 2094 では口径の大小と器高の深淺の差があることが指摘できる。これは口径の大小、器高の深淺、高台の高低差などから組椀 (二ツ椀?) の可能性が高いと考えられる。また、上塗色では赤色系と黒色系を組み合わせ、さらに器形からは椀・皿・蓋を含めた揃い椀の可能性も考えられる。上記以外の組成としては、SD 6 から総赤色椀と供伴して、断面に漆継

採掘番号	出土地点	器形	分属	上 塗 色		計 量				寸 法 (cm)			目 録	備 考		
				内面	外面	体部径	口径	体部径	口径	体部径	口径	口径			口径	口径
2	S 38	椀	A 2	赤	黒				16.1	14.4						
3	S 38	椀	A 1	黒	黒 (漆継)										ブナ	
4	S 68	椀	A 1 ?	赤 (漆継)	黒										丸に亀甲と波?	
5	S 68	椀	A 1	黒 (漆継)	黒			4.5							丸に亀甲と波?	
7	S F 101	椀	A 1 a	赤	赤			4.6								
21	S K 2403	椀	A 1	黒 (漆継)	黒 (漆継)			12.4	13.0	16.3			97°		ブナ	
22	S K 2403	椀	A 1 b	赤 (漆継)	黒	6.3	5.4	11.7	13.2	1.0						
23	S K 2403	皿	B 1	赤	赤 (体高当型)	4.5	4.5	8.9	8.7	1.3			43°		ケヤキ	
24	S K 2403	椀	A 1 c	赤	黒 (漆継)	7.2	5.4	14.8	16.2	7.5	2.5	10.0	58°		高内面に「1」	
25	S K 2403	椀	A 2 b	赤 (漆継)	黒 (漆継)	6.7	3.5	14.0		11.9	0.7				ブナ	
44	SE 2423	椀	A 1	赤	赤			13.3	16.2	14.4					53.5°	口縁部のみ点
45	SE 2423	椀	A 1	黒 (漆継)	赤			12.1		15.3	0.5					ブナ
51	S E 2094	椀	A 1 d	赤 (漆継)	黒 (漆継)	7.5	5.5	14.2	16.0	9.0	2.7	11.7	62.5°		高台内に蓮花 丸に亀甲と波紋 粟丈	
41	S E 2094	椀	A 1	黒	黒			14.2		16.9						ブナ
42	S E 2094	皿	B 1 ?	赤 (漆継)	黒 (漆継)			14.0	12.0	12.7			54°			
114	X 87190 IV	椀	A 1 ?	赤	赤			6.0	13.0	13.7						
115	X 100790 III	蓋	C 1	赤	赤 (漆継)			8.1		11.2						
132	S D 59	椀	A 1	黒 (漆継)	黒 (漆継)			3.3	13.0	15.7					ブナ	丸に草花文?
159	S D 67	椀	A 2 b	赤	赤	6.8	5.4	12.7		14.3	0.5				ブナ	内面に亀甲付
164	S D 6	椀	A 1	赤	赤			13.8		16.6						
210	X 87190 II	椀	A 1 a	黒	黒 (漆継)	6.2		11.7		15.3	1.0				ブナ	
211	X 5190	椀	A 1	赤	赤			12.8		13.1					ケヤキ	
212	X 61190 II	等	C 1	黒	黒			12.1							ケヤキ	
290	S S 509	椀	A 1	赤 (漆継)	黒 (漆継)			4.6	10.7	13.0					ブナ	
203	S S 470	椀	A 1 d	黒 (漆継)	黒 (漆継)	7.8	5.6	16.8	16.5	7.8	3.0	10.8	60°		ブナ	(内面) 草花文? (外面) 丸に亀甲、波形
205	S S 505	椀	A 1 d	黒	赤	6.9	5.4	14.1	16.1	6.9	2.6	9.5	54°			

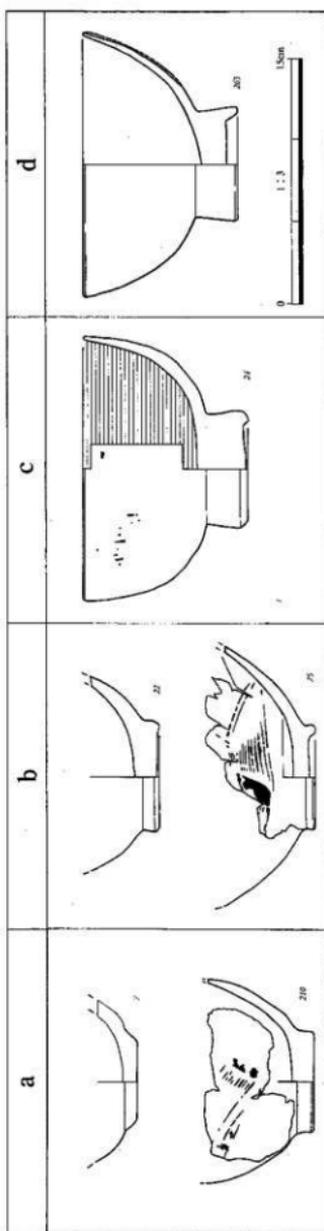
第25表 漆器計測表



第179図 黒色系漆器形態分類



第180図 赤色系漆器形態分類



第181図 高台の形態分類

ぎの痕跡がある中国製白磁皿(163)が出土している例がある。163は15世紀後半～16世紀後半の時期と考えるものである。

(2) 鏡(小札)

SK2403からは鏡(小札), SK7と包含層からは小札が出土している。SK2403出土のものは黒色漆の表面に朱漆による「面菱」が加飾されており、これと同じ意匠のものが包含層からも出土している。ただ、塗膜分析結果によると、同じ意匠であっても髹漆(塗装工程)に違いがみられる。SK2403出土のものはすべて地の粉(鉱物粒子)漆下地で、39については黒色顔料による黒色漆層を塗り重ねているものと、地の粉漆下地が2回塗り重ねられる二辺地のものがある。表面には光沢があり発色がよい。包含層出土の116は二辺地であるが、粘調な漆を用いているため、表面には刷毛目が残る発色が悪い。SK7出土の167は「面菱」が加飾されたものではないが、地の粉漆下地の二辺地のもので、さらに3層の漆塗りが加わる。また、図示していないが、下地が炭粉漆下地という珍しい例もある。これらの胎(素材)は皮と考えられることから、草摺や袖の部分に当たり、髹漆は非常に丁寧な工程がとられたものである。

(3) 漆液容器

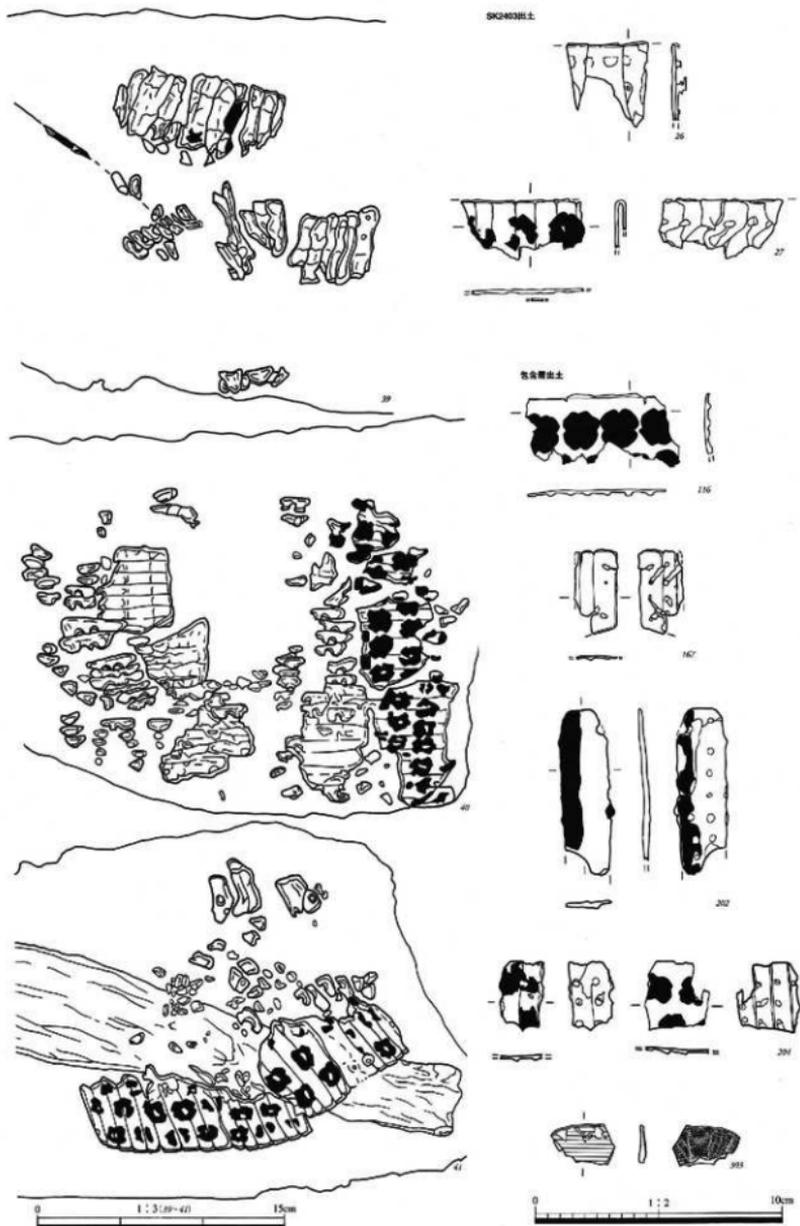
漆液容器の可能性が高いものとしてSP2317出土の円形板(19), SD647出土の漆器碗(150)・円形板(151)がある。19は内面に黒色の付着物があり、外面には点々と黒色漆が付着している。150は内面に黒色でしわくちやの付着物があり、詳細な分析はおこなっていないが、漆液容器の蓋としていた漆紙の可能性が高い。また、供作する151は両面に黒色漆が全体的に薄く残っている。これら以外に漆の塗装工具の可能性があると考えられる遺物や木製品などは出土していないため、塗師の存在を想定するのは早計であるが、漆継ぎされた陶磁器も出土していることから、何らかの形で漆液容器に蓄えた漆を使用していたと考えられる。

D 富山県内の遺跡出土漆器

当遺跡とはほぼ同時期の漆器が報告されている遺跡は12遺跡ある²⁸。ここでは一括出土したものを中心に抽出し、計測値を第27表, 第184図に示し、形態, 法量を比較する。なお形態分類については、前述のとおりである。

出土遺物 種別 器種	漆 器										備 考	供 伴 遺 物	
	内 面	外 面	計 測 値 (cm)				口 径	体 部 高	高 台 高	器 高			
			高 台 径	底 径	体 部 径	口 径							
SK8	2	鏡 赤	黒				16.1	(4.4)					円形板
	3	鏡 黒	黒(漆繪)										
	4	鏡 黒(漆繪)	黒									丸に亀甲と肩?	
	5	鏡 黒(漆繪)	黒		4.8							丸に亀甲と肩?	
SK2403	21	鏡 黒(漆繪)	黒(漆繪)			12.4	13.0	(6.3)					瀬戸美濃 鏡(小札) 新 加工材 加工板
	22	鏡 黒(漆繪)	黒	6.3	5.4	11.7		(3.2)	1.0				
	23	皿 赤	赤(高台内面)		4.4	6.9	8.7	1.3					
	24	鏡 赤	黒(漆繪)	7.2	5.4	14.8	16.2	7.5	2.5	10.0	高台内に「上」		
	25	鏡 黒(漆繪)	黒(漆繪)	6.7	5.5	(14.6)		(4.9)	0.7				
SE2423	44	鏡 赤	赤			(14.5)	16.2	(4.4)				口縁部のみ黒	
	45	鏡 黒(漆繪)	黒	7.2	6.2	12.1		(5.3)	0.6				
SE3094	61	鏡 黒	黒			14.2		(6.9)					下駄
	62	皿 黒(漆繪)	黒(漆繪)			11.0	12.0	(2.7)					
SD647	150	鏡 黒	黒	6.6	5.4	(12.7)		(4.3)	0.5		内面に漆紙付着	円形板	
SD6	164	鏡 赤	赤			(15.8)	16.6	(3.0)				白磁・加工髹	

第26表 一括出土遺物一覽



第182図 鏡・小札

1 梅原胡摩堂遺跡¹⁸⁷：小矢部川の支流、大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に位置する。中世から近世にわたる集落遺跡で、中世後期（15世紀～16世紀）には大規模な区画溝が巡る領主クラスの居館がみられる。漆器には椀・皿・鉢があるが、一括遺物は少ない。組成では椀が79.4%を占め、椀における黒色系の比率は69.2%、うち漆絵が施されたものは76%である。赤色系椀はすべて内赤外黒のものである。皿においては赤色系が71.4%を占め、黒色系と赤色系の60%に漆絵がある。法量は椀に3タイプみられる。漆器以外に漆関連の遺物として漆液容器が出土している。

3 田尻遺跡¹⁸⁹：大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に位置する集落遺跡である。遺跡の時期は12世紀後半～15世紀前半と、16世紀～18世紀に大きく分けられる。漆器には椀・皿があり、椀の比率は57.1%である。椀は全て漆絵が施された黒色系である。皿は黒色系：赤色系が3：1の割合で、赤色系は外面黒色で漆絵が施されたものである。法量は椀、皿とも1タイプのみである。

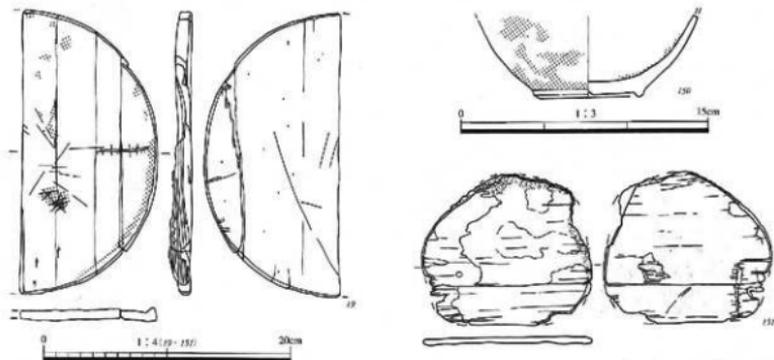
4 石名田木舟遺跡¹⁹¹：小矢部川と庄川によって形成された扇状地に位置し、弥生時代・古代～近世にかけての集落遺跡が確認されているが、中世は天正地震（1586年）で崩落、埋没したといわれる木舟城の城下町である。漆器は溝から一括出土したもので、椀の比率は66.7%である。黒色系椀の半数に漆絵が施され、赤色系椀においては総赤のものが半数ある。皿は全て漆絵が施された黒色系である。法量は椀が大小それぞれに浅深の2タイプ、皿は1タイプある。

5 木舟北遺跡¹⁹²：石名田木舟遺跡の北側に位置し、木舟城下の一部と考えられ、漆器においても石名田木舟遺跡とほぼ同様な傾向がみられる。

7 井口城跡¹⁹³：赤祖父川左岸、標高108m～110mに立地する南北朝期の平城で、城の規模は約90m四方の方形半郭に出丸がついたものとされ、遺構の時期は15世紀後半～16世紀前半を中心とする。漆器には椀、皿、折敷がある。椀の比率は70%、椀・皿とも全て黒色系で、椀のうち漆絵が施されたものは85.7%、皿においては100%である。法量は椀、皿とも1タイプである。漆器以外に漆関連の遺物として、漆が付着した刷毛や筥が出土している。

8 小泉遺跡¹⁹⁴：庄川と和田川との複合扇状地で、庄川右岸に沿った微高地上に立地し、縄文時代前期後半を主体とする。漆器は中世（16世紀後半）の井戸から出土しており、全て漆絵が施された黒色系の椀・皿である。

10 小倉中稲遺跡¹⁹⁵：井田川左岸、峠川の自然堤防上に位置し、古代末～近世にかけての集落遺跡で



第183図 漆液容器 (150 1/3, 19・151 1/4)

ある。漆器は井戸からの一括出土で、椀・皿があり、椀の比率は20%で、内赤外黒で外面に漆絵が施されている。皿は全て黒色系で、漆絵が施される比率は75%である。法量は椀が1タイプ、皿が大小2タイプある。

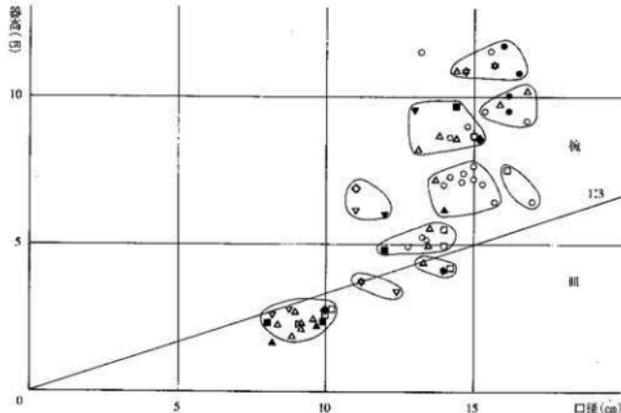
11 友坂遺跡²¹⁴：井田川の左岸に位置し、古代～近世にかかる集落遺跡で、中世には在地領主の居館的性格をもつ遺構が確認されている。漆器は全て椀で、黒色系が80%を占め、全て漆絵が施されている。法量は浅深の2タイプある。

12 弓庄城跡²¹⁷：白岩川に形成された河岸段丘上、標高45m～50mに立地する運郭式平城で、15世紀後半～17世紀初めの遺物が出土している。漆器は16世紀後半～17世紀初めの溝から一括出土したものを主体とし、椀、折敷、箱があるが、椀が89.2%を占める。椀においては黒色系が92%を占め、漆絵が施されている比率は82.6%、また内赤外黒椀では100%である。法量は大中小あり、大は深さにより3タイプ、中と小はそれぞれ浅深の2タイプにわかれる。漆器以外に漆関連の遺物として、漆が付着した篋が出土している。

漆器の組成は小倉中稲遺跡以外は、椀が圧倒的に多い。椀において黒色系が占める比率は高く、漆絵が施されたものはその半数以上である。赤色系の椀については内赤のみの5遺跡と、内赤と総赤がある開群大滝遺跡・石名田木舟遺跡に分かれる²¹⁸。後者はともに木舟城の城下町であることから同じ傾向がみられるが、総赤が内赤を上回っているのは開群大滝遺跡のみである。皿においては開群大滝遺跡と梅原胡摩堂遺跡以外は漆絵を施した黒色系のみ、もしくはそれを主体としている。ただ、梅原胡摩堂遺跡の赤色系皿は、その60%が内赤外黒に漆絵が施されたもので、総赤皿は高台裏黒色の、いわゆる「根来手」のものであり、これは開群大滝遺跡も同様である。

形態は開群大滝遺跡と同様にAⅠ類を主体とする遺跡が多いが、石名田木舟遺跡・木舟北遺跡ではAⅠ類とAⅡ類が同率、山尻遺跡・友坂遺跡ではAⅡ類が主体である。ただ、遺跡の時期は田尻遺跡・友坂遺跡はやや古い。高台の形態はAⅠ類ではd、b、cタイプの順に、AⅡ類ではb、dタイプの順、皿ではすべてbタイプである。cタイプは開群大滝遺跡の他、梅原胡摩堂遺跡、桜町遺跡、小倉中稲遺跡、弓庄城でみられる。

法量は椀では口径で3法量、それぞれ器高で2～3法量に分かれるのに対し、皿は口径で3法量に分かれるのみである。椀の法量分化が最も明確なのは弓庄城であるが、開群大滝遺跡、梅原胡摩堂遺



第184図 中世後半の漆器法量

跡、石名田木舟遺跡、友坂遺跡でもみられる。ただ、口径16cm以上の大型の碗に法量分化がみられるのは弓庄城と開群大滝遺跡のみである。これらは16世紀後半～17世紀初めにかけての城下町や領主クラスの居館とみられる遺跡である。

漆器以外の漆関連遺物が出土したのは梅原胡摩堂遺跡、井口城、弓庄城で、梅原胡摩堂遺跡の漆液容器から漆の使用を、井口城と弓庄城の漆碗からは漆職人の存在を推定できる。

E まとめ

以上、開群大滝遺跡出土の木製品から特徴的な遺物に限定し、県内出土漆器と比較しながらみてきたが、出土陶磁器においては瀬戸美濃の比率が非常に高いことが前節で述べられている。陶磁器から遺跡の時期を16世紀後半と考えているが、漆器碗もその形態からほぼ同時期であるとみられる。四柳嘉章氏によると、該期の大きな特色は都市部を中心に総赤色碗が内面赤色碗を上回ることで、裕福な商人層では玉縁の三ツ碗や端反碗皿など漆下地の良質な漆器を所有するようになることが指摘されている⁴⁹。当遺跡の漆器においては総赤色碗が内面赤色碗を上回る、法量分化から組碗（三ツ碗）の可能性が高い、漆器皿・蓋を含めた揃碗を想定できるなど、木舟城の城下町（町屋）としてのやや都市的な傾向が窺える。また、碗が圧倒的に多く、皿が僅かなのは、瀬戸美濃や白磁の皿といった陶磁器との補充関係を示していると考えられる。

一方、一括して出土したものではないが、非常に丁寧に作られた「画菱」の意匠をもつ小札に髹漆の違いがあることや漆液容器からは、例えば具足師といった漆職人の存在を想定できる。これは七尾城シッケ地区遺跡出土漆器の塗膜分析結果と漆液容器から塗師の存在を推定しているように⁵⁰、この町屋の一角に漆職人の居住地があったこと示しているといえよう。

出土した特徴的な木製品の比較、検討から木舟城の城下町における漆職人の町屋を想定したが、その町屋と町割りについては本稿では明確にできなかった。今後、周辺の木舟城関連遺跡からの出土例により再検討したいと考えている。

(中川道子)

注1 奈良国立文化財研究所 1985 「木器集成図録 近畿古代編」 同研究所史料第27冊

注2 当遺跡では、曲物や桶・手桶が井戸枠として利用されているが、これらは本来の用途としての容器に分類している。

注3 遺存状態のよいものについて樹種鑑定している。詳細については自然科学的分析Ⅳ（第二分冊）を参照していただきたい。

注4 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材からみた人間・植物関係史」『植生史研究 特別第1号』 植生史研究会

注5 自然科学的分析Ⅳ（第二分冊）を参照していただきたい。

注6 二島通子 1994 「4 開群大滝遺跡出土の漆器について」『埋蔵文化財年報』(5) 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

二島氏によると杯とされているが、本稿では径高指数により皿としている。

注7 西梅喜幸 1997 「Ⅱ 北陸の漆器編年」『北陸の漆器考古学—中世とその前後—』第10回北陸中世土器研究会記念特集号 北陸中世土器研究会

注8 北陸中世土器研究会 1997 「北陸の漆器考古学—中世とその前後—」

開群大滝遺跡以外の漆器の計測値は上記を引用した。

注9 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 「第Ⅱ章 遺物 D. 木製品」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 調査報告第7集

注10 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 「梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告」 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 調査報告第8集

注11 福岡町教育委員会 1997 「石名田木舟遺跡発掘調査報告書」

- 注12 福岡町教育委員会 1996 「木舟北遺跡」
- 注13 井口村教育委員会 1990 「井口城跡発掘調査概要」
- 注14 大門町教育委員会 1982 「小泉遺跡」
- 注15 越中町教育委員会 1993 「富山県越中町小倉中稲遺跡発掘調査報告書Ⅰ」
越中町教育委員会 1994 「富山県越中町小倉中稲遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
- 注16 越中町教育委員会 1984 「富山県越中町友坂遺跡発掘調査報告書」
越中町教育委員会 1991 「富山県越中町友坂遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
越中町教育委員会 1997 「富山県越中町友坂遺跡発掘調査報告書Ⅲ」
- 注17 上市町教育委員会 1991 「富山県上市町弓止城跡第1次緊急発掘調査概要」
上市町教育委員会 1992 「富山県上市町弓止城跡第2次緊急発掘調査概要」
上市町教育委員会 1993 「富山県上市町弓止城跡第3次緊急発掘調査概要」
上市町教育委員会 1994 「富山県上市町弓止城跡第4次緊急発掘調査概要」
上市町教育委員会 1995 「富山県上市町弓止城跡第5次緊急発掘調査概要」
- 注18 小倉中稲遺跡の漆器底部②は器種不明であるが、総赤皿の可能性が高いと考えられる。
- 注19 注6と同じ
- 注20 七尾市教育委員会 1992 「七尾城城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書」
岡柳嘉章 1992 「七尾城城跡シッケ地区遺跡出土漆器の産地分析（第1次報告）」「七尾城城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書」
岡柳嘉章 1995 「16世紀の漆器—能登・七尾城城跡シッケ地区遺跡出土漆器第2次報告」『石川考古学研究会々誌』第38号

4 地崎遺跡における若干の考察

A 近世民家 (第185～189図)

現在みられる民家は、巨視的にみて東北・北陸では広間型、南関東・東海・近畿以西では四間取りが優先的で、広間型は囲炉裏のある生活中心的な部屋があり、家屋の構造も頑強で、東北・北陸等では住宅規模も大きく一棟の中に生活機能を集中させる傾向があるといわれている⁸¹。

富山県では1970年・1975年に残存する民家の緊急調査が行われた。そして富山県民家の特徴としてヒロマを中心とした間取りと構造をあげ、さらにヒロマⅠ型～Ⅲ型の分類が行われた⁸²。他の民俗調査では富山県砺波平野には過去にニワ(土間)とヒロマからなる「二坪もの」といわれる地床住居があり、明治初年頃は地床住居が普遍的であったといわれる⁸¹。残存する民家には17世紀以前に遡るものではなく、18世紀中頃以降の建築と推定されるものが大部分である。当遺跡では西側調査区と東側調査区にそれぞれ2棟ずつ、計4棟の建物を検出した。その年代は、出土遺物と遺構の切り合いから、およそⅠ期：16世紀末～17世紀前半(SB3・SB4)、Ⅱ期：17世紀後半～18世紀前半(SB1・SB2)の二時期に分けられ、各期に西と東に1棟ずつ建物が存在したと推定される。これらの建物から民家の一系譜について考察したい。

まず建物の周囲の様子をみると、西側調査区の建物は2時期とも屏敷地を区画する溝に囲まれている。東側調査区の建物は区画溝をもたないが、北側に幅約2mの溝があり、Ⅱ期にはその溝と物の間に道路の側溝と思われる二条の溝がある。さらに側溝が北側の溝に接する地点とその対岸に集石と数本の杭が残っており、これらは橋を支えたものではないかと思われる。

建物の構造は基本的に掘立柱建物であるが、西側調査区のⅡ期のSB1は掘立柱建物に一部礎石を併用している。また東側調査区のSB2・SB4は砂質の地盤の上に建てられており、SB2の上屋柱とSB4の棟支え柱の柱穴は規模が大きく柱痕が残っていない点から、柱を立てる前に土を入れ替える基礎工を行い、礎石或いは土台を併用した掘立柱建物ではないかと考えられる。

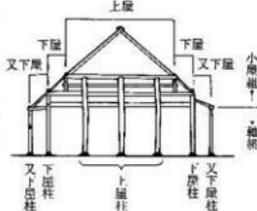
西側調査区のSB1とSB3、東側調査区のSB2とSB4は建物の方向や推定される間取りがそれぞれ似通っており、遺物の年代からみても時期的に隔絶したものではなく、それぞれが建て替えられたものと思われる。建物の規模はどちらも大型化している。この建て替えの時期はおおよそ17C中頃に設定されるが、加賀藩では寛文8年(1669)に検約の触れが出されており、それによると、

「一、家作は自今以後二間梁、ひさしは六尺に過ぐべからず 〆高多持候百姓、土の間広く仕候義は不_レ善、〆往還筋人宿仕ものは各別之事」

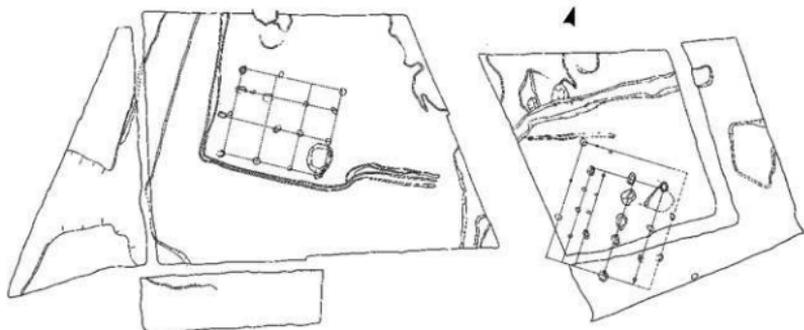
と百姓の住居の制限がなされている⁸³。「間」には、建築用語で柱と柱の間を示す

場合と、長さの単位として使われる場合がある。古代から鎌倉時代には前者の意味の間面記法が用いられ、室町時代以降小屋構造の変化により徐々に間面記法はみられなくなるといわれるが⁸⁴、「ひさしは六尺」と長さの単位として使用したならば一間と言い換えられる処を尺で示している点から、ここでいう「二間梁」は前者の意味で「梁間二間」と解釈してよいだろう。そうするとⅡ期のSB1は、北側の下屋・又下屋部分をひさしと言い換えれば、「二間梁、ひさし六尺」に相当するが、SB2はこの規定におさまらない。SB2は寛文8年以前に建てられたか、高持百姓であった可能性がある。

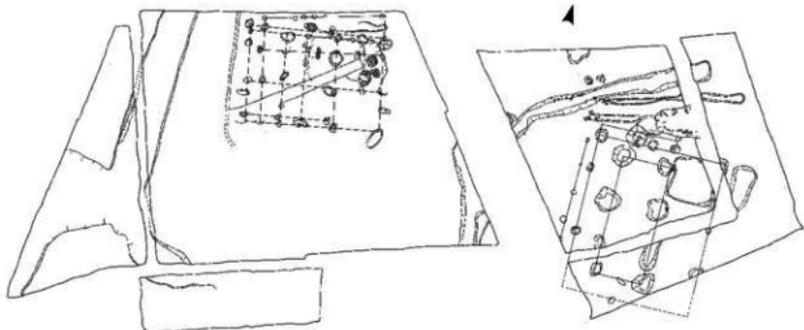
次にこれらの建物に関連する土坑や井戸の配置から建物の間取り



第185図 用語例



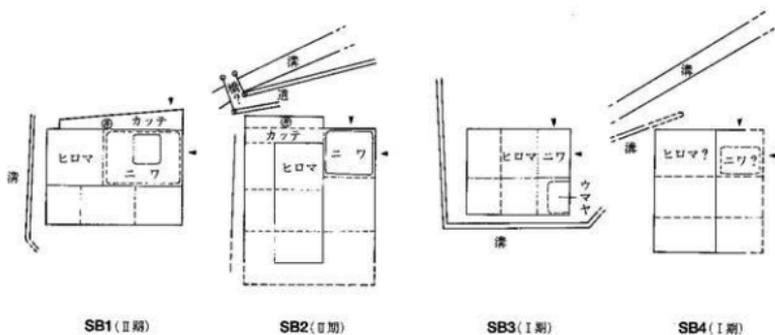
I期(16世紀末～17世紀前半)



II期(17世紀後半～18世紀前半)

0 20m

第186図 遺構の変遷



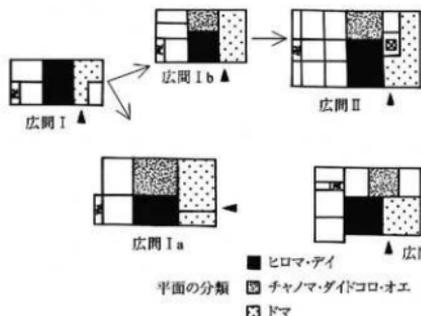
SB1(II期)

SB2(II期)

SB3(I期)

SB4(I期)

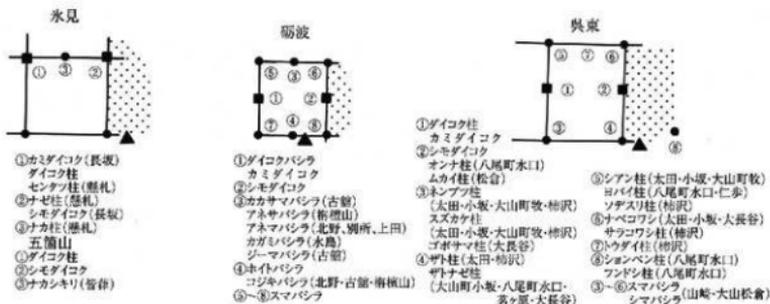
第187図 建物の間取推定復原図 (文献〔河西1993〕に一部加筆)



番号	居住者氏名	所在地	建立年代	間取形式	層構造形式・資材
1	水上	富山市永輪町発	18C末	I-b	入・字・既・オロシ・既
2	高田	砺波市東高屋	18C末?	III	香・茅・オロシ・既
3	杉沢	入善町新屋	天保頃	I-b	入・既・も・既・オロシ・既
4	富山	入善町目川	18C中	II	既・既
5	谷川	八尾町下仁歩	18C末	I	入・字
6	中谷	平村相倉	18C	I-a	合・切・字・兼・入・既・既
7	野原	利賀村北豆谷	18C末~19C初	I	合・茅・既・兼・入・既・既
8	東田	福野町安楽	18C末	III	香・茅・オロシ・既



第188図 富山県の民家(農家)例(「富山県の民家」より抜粋)



第189図 柱の俗称

について考えてみたい。SB1・SB2については、当遺跡の調査を行った平成5年度の年報で概略を報じたが、その時点では時間的な制約もあり十分な検討ができなかったため、本報告と若干異なる部分もある。しかしそれらの建物は、河西健二氏の古墳時代から近世の建物の変遷に関する論考の中で、富山県の民家の特徴に鑑みた構造や間取りについての考察が行われており¹⁹⁾、ここでは氏の成果を参考にしつつ検討を加えていきたい。

I期のSB3は敷地内南東隅に厩の可能性ある土坑がみられる。SB4は北東隅に土間の可能性のある土坑がみられるが、土坑の西側は削平を受け東側は遺構に切られて原形は不明である。II期のSB1・SB2は両者とも北東隅に土間と思われる土坑があり、北端には井戸がある。3種の建物に土間と考えられる土坑が付属しており、検出はされなかったがSB3においても、厩と考えられる土坑に隣接して土間部分があった可能性は高いと考えられる。構造は掘立柱建物であるが、この頃には土間と広間を中心とした広間型の近世民家が成立していたと思われる。このことを前提に間取りを推定すると、4種の建物はすべて北東隅にニワ(土間)を配し、これに接してヒロマがあったと思われる。

またSB1は前節で述べたように、ヒロマとニワの間に大黒柱があったと推測する。「富山県史 民俗編」²⁰⁾によれば、生活の中心となった広間の柱には名があり、広間の奥側の真ん中にある柱をダイコク柱とよび、その向かい、つまり広間と土間境の真ん中にある柱をシモダイコクなどとよんだという。この民俗例の呼称からすれば、SB1のSP205は位置的には土間と広間の境にあたり、シモダイコクに相当するが、これに対応しダイコク柱とすべきSP323またはSP143の柱は細く柱穴の規模も一般的である。SB1においては大黒柱は1本で、それは土間と広間の境に据えられたと考える方が妥当ではないだろうか。また、矛盾するようだがSP205は棟支え柱ではなく家を支える上で最も重要な柱とはいえない。しかし、県史によると、古民家では大黒柱を特別に太くしてはいいが家の格を誇示するため徐々に太くなっていったといわれ、建築力学上の理由で太くされたものではないようである。家の格を示す為には大黒柱は家の奥よりも他人の目に触れやすい場所にある方がよく、生活の中心となる広間と土間の間に据えることで家人の精神的な支えともなったのではないだろうか。

SB1とSB2は北側に井戸を設けており、これは屋根の下にある。台所(カッテ)に流しを設けると、その水の溜め方には、流水を土間の一部に引き入れ水槽にこれを溜める方法と、外の水源から水運び水運に溜める方法があり、県内の民家には前者を用いて外壁で遮られた外から内の流しへと水を引き入れている例がある。この場合、台所は土間の一部または広間の端に設けられる。台所にあるべき水槽や竈など、住居の上部空間にあった施設が遺構として検出されない限り推定の域を出ないが、SB1・SB2でも、(井戸と台所の間に外壁があったかどうかは断定できないが)井戸に南接する空間にカッテがあった可能性が高いと考えられる。また、SB1とSB2の井戸には構造的な違いがあり、この点については拙稿で考察した²¹⁾が、SB1の井戸が普遍的にある皿槽を用い、SB2が非量産的でも強度のある削り抜き丸太を用いたものであることは、先にSB2の建物規模の大きさの要因として考えた、家の階級差に結びつくものではないだろうか。

以上当遺跡で検出した近世民家について検討したが、建物の範囲を推定するに当たっては柱穴の並びと柱痕の有無、溝・井戸・土坑との位置関係を重要視してきた。河西氏が指摘するように近世民家の成立には軸組構造と上屋檣造の分離という重要な要素があると思われるが、この点については考察が至らなかった。建築学的にみて批判される点もあるかと思われるが、今後検討を重ねていきたい。

B 出土遺物の組成 (第190図, 第28表)

出土遺物について、主にその組成の面から特徴を調べたい。数量を示すにあたっては、本来なら口縁部残存率により集計した数量等を併記すべきであろうが、時間的な制約もあり、接合可能な破片は1個体1点として数え、その他は破片数を点数として加算した。

当遺跡出土の土器陶磁器のうち、遺構から出土したものについて組成を調べると、もっとも多いのが越中瀬戸で半数を占め、次いで唐津・伊万里がほぼ同じ割合で一定量あり、その他に少数ではあるが、土師器皿、珠洲、輸入陶磁器、瀬戸美濃、土師質土器、産地不明の陶器がある。これらはほとんどが16世紀～18世紀の範疇におさまるものであるが、生産された時期が中世に遡る珠洲、中国製青磁、中国製白磁については古い時代の遺物が混入したものと考える。

次に時期が特定できる遺構、すなわちⅠ期：16世紀末～17世紀前半、Ⅱ期：17世紀後半～18世紀前半に分類してその出土遺物を調べてみる。土器陶磁器の組成は遺構全体を通してみた場合と大差はないが、唐津・伊万里についてはⅠ期よりⅡ期の方が数量、比率ともに増加している。越中瀬戸も数量的にはⅡ期の方が多く出土しているのであるが、比率は唐津・伊万里の増加分に押されてやや減少している。

時期別の組成をおおまかにみだが、同じ時期の中でも遺構による偏りはないだろうか。以下、西側調査区と東側調査区の各建物に関する遺物を比較していきたい。

Ⅰ期では、SB3とそれに関連する溝(SD5)、土坑(SK170・SK296・SK363)の遺物は越中瀬戸が群を抜いて多く、土師器皿、瀬戸美濃、唐津、伊万里が少しずつある。他に漆器柄もある。瀬戸美濃の中には天目茶碗が含まれ、SK363から茶臼が出土している。加賀藩では文政2年(1819)風俗改めが申し渡され、その中で

「一、三味曳・尺八・胡・象戯(将棋)・茶湯杯、農菜之坊=可=相成一品不可、致候」

と茶湯が禁じられている⁸³⁾が、それ以前には百姓の中にも飲茶が行われていた可能性を示す事例である。また硯も出土しており、墨書土器がこの民家において施文されたことが裏付けられる。SB4とそれに関連する土坑(SK677)は土師質土器、越中瀬戸、伊万里、曲物が1点ずつ出土しているだけである。

Ⅱ期では、SB1とそれに関連する土坑(SK330・SK394・SK395)の遺物は越中瀬戸が多く、土師質土器・伊万里も少量あり、他に曲物・砥石・礎石に転用された石臼が出土している。SB2とそれに関連する溝(SD462)、土坑(SK482・SK500・SK582・SK644)の遺物は、越中瀬戸が多く、唐津・伊万里が一定量あり、信楽や混入と思われる珠洲が1点ずつある。他には漆器柄・曲物・石鉢がある。伊万里の中には小杯が含まれ、建物に関する遺構から出土した小杯は1点であるが、包含層出土のものも含めると、伊万里の小杯が6点、越中瀬戸と陶器の小杯が1点ずつ出土している。このうち西側調査区から出土したものは1点のみで他は東側調査区の包含層と遺構から出土しており、これらの生産時期に差がみられないことから、殆どがSB2において使用された可能性が高い。

Ⅰ期ではSB4関連の遺物が少ないため比較しにくい、Ⅱ期のSB1・SB2の様相を比べると、SB2の方が唐津・伊万里の出土量が多く、比率も高くなっている。特に伊万里は包含層や他の遺構をみても東側調査区からの出土が圧倒的に多い。前項では建物の規模や井戸の構造からSB1とSB2に階級差があるかもしれないと考えたが、遺物にみられる差異もそれに関連するものであろうか。

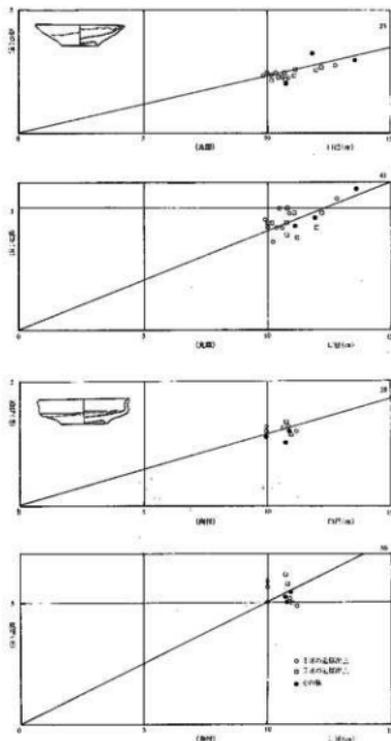
C 越中瀬戸皿の法量 (第191図)

越中瀬戸は、黒川窯・小森窯・山下窯・彦衛門窯の採集資料による編年が行われている¹¹⁸。その中で宮田進一氏は「丸皿は黒川窯に比べて小森窯・山下窯では器高・底径が少し小さくなり、彦衛門窯では器高は変わらないが、底径がさらに小さくなる」と指摘しておられる。窯の操業開始時期は黒川窯は天正13年以前の天正年間頃に、小森窯・山下窯はそれよりやや遅い時期に、彦衛門窯は17世紀初めに操業が開始されたと考えられており、16世紀末～17世紀初めの間に法量の変化があるといえる。前項で述べたとおり当遺跡からは越中瀬戸が多数出土しており、皿の法量のグラフ化を試みた(第191図)。データとして抽出した資料は口縁部または底部が30%以上残存するものである。ここでは皿を丸皿と向付に分類して口径に対する器高と底径の比率を示す。

丸皿については、口径は10～13cm前後の幅があるが、口径に対する器高の比率(径高指数)は平均値23の付近に集まり、ほとんどばらつきがない。次に口径に対する底径の比率をみると、ややばらつきがあるが、時期別に分かれるものではない。言い方をかえれば、一つの遺構内の遺物、例えばSP483出土の4点の比率は33.9～43.2に分散しており、同一遺構の中でもそれ位のばらつきはあるといえる。視野を広げて既報告の黒川窯の丸皿と比較すると、黒川窯には底径が口径の半分以上になるものが多いが、当遺跡のものは口径に対する底径の比率は平均41で、半分以上を越えるものはない。越中瀬戸操業開始期の法量からは変化がみられるが、17世紀代にはあまり大きな法量変化はないといえる。

向付の口径に対する器高と底径の比率についても、丸皿と同様なことがいえる。つけ加える点は、口径の分布範囲が丸皿より絞られている点で、およそ10～11cm前後におさまっている。この点は当財団が調査を行った梅原胡摩堂遺跡の調査報告で呈示された越中瀬戸の法量表にも表れている特徴であり、径高指数の平均値も29と近似している¹¹⁹。向付の規格が一定範囲に限られる理由としては、①向付が連房式登窯期(彦衛門窯)に限って焼かれた製品であること。②用途が限られていたこと等が考えられる。

以上当遺跡の越中瀬戸皿の法量について述べたが、一遺跡の事例が普遍性をもつとは限らない。今後の近世遺跡の調査の進展とともに再検討していきたい。



第191図 越中瀬戸法量表

D 墨書土器 (第192図, 第29表)

県内の墨書土器は、特に古代の遺跡でまとまった量の出土がみられ、近年の発掘調査では富山県総合運動公園内遺跡群²¹⁰、任海宮田遺跡²¹¹等から多量の墨書土器が出土している。昨年度当財団が調査を行った中名Ⅰ・Ⅴ遺跡からも8~10世紀の墨書土器が出土し考察が行われている²¹²。近世の遺跡でも墨書土器は散見されるが、一遺跡から一定量の出土をみるのは弓庄城跡²¹³、寺家新屋敷館跡²¹⁴、増山城跡²¹⁵などの城館跡が主である。当遺跡は近世に属するが、22点の墨書土器が出土した。墨書の種類と、それらが書かれた陶磁器の種類と器種、及び部位、出土遺構を第29表に示す。

墨書土器は、「供膳具が大半で、集落内で一般的に存在した土器から選択される」といわれるが²¹⁶、当遺跡の場合も例に違わずすべて皿形態で、県内の近世遺跡では最も普遍的にみられる越中瀬戸がその大半を占める。他には唐津・京焼風唐津・伊万里が数点ある。墨書が施された部位はすべて底部外面(高台内)で、最も目立たない場所が選ばれたようである。例外として38は高台内に「二」、見込みみに「次工門」と二箇所に墨書がある。

墨書土器が出土した遺構は、SB1・SB2の柱穴、土間(SK500)の埋土、溝、建物の廃絶に伴う廃棄土坑と考えられる遺構、その他の土坑で、包含層から出土したものもある。まとまった量の出土がみられるのは廃棄土坑である。

墨書土器はすべて割れており、ほとんどのものは日常食器として使用できなくなったために捨てられたと考えられる。しかし、一点のみ見込みみに人名が書かれている38は、出土した柱穴が建物の北端に位置し、特殊な形態の柱穴で建物の土台の可能性があると考えたものであり、地鎮等現

墨書	種類	器種	部位	採掘番号(出土遺構)	
記号	「○」	越中瀬戸	皿	底外面	181(S K 280), 184・185(S K 296), 201(S K 363), 302(西包), 311(西包)
	「十」(記号*)	越中瀬戸	皿	底外面	303(東包)
		越中瀬戸	皿(向付)	底外面	202(S K 363), 341(西包)
	「□」(記号*)	越中瀬戸	皿(向付)	底外面	182(S K 280)
文字	「一」	越中瀬戸	皿	底外面	304(東包)
		唐津	皿	底外面	180(S K 265)
	「二」	越中瀬戸	皿(向付)	底外面	38(S B 2の S P 573)
	「九」	越中瀬戸	皿(向付)	底外面	256(S K 500), 279(S K 644)
	「次工門」	越中瀬戸	皿(向付)	底外面	38(S B 2の S P 573)
字	「X」[小]	京焼風唐津	皿	底外面	398
	「□」[小]	伊万里	皿	底外面	452
	「□」	唐津	皿	底外面	122(S D 450)
	不明	越中瀬戸	皿(向付)	底外面	14(S B 1の S P 221), 188(S K 296)
	伊万里	皿	底外面	428	

第29表 墨書土器 (総数22点)



第192図 墨書例

術的な要素をもつ可能性はないだろうか。断定はできないが、今後の検討課題としておきたい。

清水みき氏は墨書土器を「ある集団組織内での土器情報管理に関する情報伝達手段」と規定し、文字墨書土器の内容にはa土器の帰属、所属を示すもの、b用途に関する情報を伝達するもの、c筆記素材として土器を副次的に利用するものがあるとする²¹⁷。これは近世の墨書土器においても妥当性をもつ見解といえよう。また記号墨書土器についてもこれらの目的を代行するものと考ええる。当遺跡の墨書土器の場合は、38以外はすべて高台内に施される点に規格性があり、aまたはbの目的をもって施文されたものと考えられる。

墨書の内容は記号と文字に大別される。「一」は記号の可能性もあるが、180・304に関しては高台内の片方に寄せてかかっていることや、字体から「二」「九」等と同様の漢数字である可能性の方が高いと思われる。「+」については文字の大きさや書体からみて漢数字の可能性は低く、記号と思われる。墨書内容とそれが施された種類の関係についてみると、「○」「+」の記号は越中瀬戸皿に限られる。特に「○」は丸皿のみで、向付形態の皿にはみられない。文字は越中瀬戸以外の種類の皿にもみられる。また文字は漢数字を除けば一種類一個体で、記号は複数の個体に使用される。

墨書として施される記号と文字の比率は、県内の報告例をみると、古代の遺跡においては文字の割合が圧倒的に高いが、近世になると先述した城館跡で記号の割合が増加する傾向がうかがえる。当遺跡における墨書土器の様相もそれら城館跡の様相に似ている。もっとも古代でも長岡京等都城では夥しい数の記号墨書土器が出土しており、山中章氏は記号墨書土器と線刻土器が相補完する関係にあり、これらが非識字層の個人用食器や小集団で用いる食器を他と区別するため施文されたものであることを明快に論じておられる。また神奈川県四之宮下郷遺跡の例を挙げて古代都城でみられたこれらの機能が、やがて地方の集落へと波及していく状況が示唆されている²¹⁸。県内の古代の遺跡においては、都城のように非識字層を相当数含む膨大な数の人間が集団で生活し、共同作業をするような状況が想定される遺跡は未調査であるといえる。

当遺跡の例に置き換えて考えてみると、古代都城の記号墨書土器の様相と異なる点は、記号の種類の数とその形態の単純さ、施文される位置の規格性にある。また記号墨書土器は西側調査区の遺構及び包含層からのみ出土しており、逆に文字墨書土器は東側調査区からの出土がほとんどで「一」・「□」[小₉]の2点のみ西側調査区から出土しているがこれらも座標Y72以東にあたり、SB1・SB3に関係しないものかもしれない。つまり、西側調査区の民家では記号墨書、東側調査区の民家では文字墨書により土器が区別されたものと推測できるのである。また出土した遺構は、西側調査区ではI期のSB3の廃棄土坑やSB1の土間より新しく柱穴より古い土坑で、西側ではSB2の土間と思われるSK500の埋土等であるから、墨書土器がそれらの埋土に混入する時期は主にI期からII期の移行期にあると考えられ、上述した墨書土器の違いは時期的な差によるものではないと考える。

山中氏はヘラ記号の施文例を媒介として①記号の方が単純で施文しやすい。②文字を施文してもその意味を理解できる人間がいない。の2ケースを記号が使用される理由として仮定し、古代都城においては複雑な記号が多いことから②がその理由であると指摘されたが、当遺跡の場合は①②ともその理由として否めず、どちらかに確定する事はできない。ただ漢数字にしても「二・九」が出土している東側調査区においては西側調査区のそれに比べてより細密な器の区別が行われたであろうことは肯定できよう。これは前述してきたような両調査区の民家の階級差に関わる事象として捉えておきたい。ただし、これは当遺跡の建物に関する墨書土器について比較検討した結果、仮定される事柄であって、他の近世遺跡から出土する墨書土器全般に当てはまるものとは言い切れない。今後の近世民家の調査

事例の増加が待たれる。

E まとめ

天正13年(1585)以降、砺波郡を含む越中の西三郡は加賀藩政下となった。加賀藩は農政改革として慶安4年(1651)改作法を実施し、万治2年(1659)十村代官制をした。改作法は寛文12年(1672)頃完成し、十村などの農村支配体制もこの頃確立した。地崎は元和5年(1619)には道明組に属し、その後の組替で寛永11年(1634)には土屋宗右衛門組、天保10年(1839)には糸岡組に属したという記録が残っている^{注3}。地崎に十村を務めた家があった記録は見あたらないが、農民には本百姓、水呑百姓という階級差が生まれており、前述してきたような様々な事象から、当遺跡で検出した近世民家にもその差が表れているのではないかと考えた。

また17世紀末～18世紀初頭の元禄期は、近世農法の成立期であり、1697年に宮崎安貞の『農業全書』が著され、その後これを鑑として数多くの農書が編まれた時期でもある。最も早くこれが引用されるのは加賀の『耕稼春秋』(1707年)で、五畿内や西南日本の集約化のすすんだ農業を評価し、「其丁寧成事加越能に様なし」と述べている。またその2年後には同じ加賀で『農事遺書』が著されている^{注4}。農学の進展が農民の生活を即座に向上させるとも思えないが、農村支配体制だけでなく、農法の改良も進められた時期であるといえる。

この様な時代背景をもつ農民の生活は、慶安2年(1649)の慶安御触書やその後の藩の規制によって、衣食住にわたり様々な制限がなされたが、実際はどの程度の拘束力があったのであろうか。遺物から、奢侈と思われる飲茶や飲酒も行われていた可能性が考えられる。今後の近世遺跡の調査の進展とともに、農村や町屋や様々な階級の人々の生活が明らかになっていくであろう。(越前慎子)

注1 杉本尚水 1975 「古代作居とその系統—地理学的・民俗学的考察の試み—」『日本古代の探究—家』社会思想社

注2 富山県教育委員会 1980 『富山県の民家(富山県民家緊急調査報告書)』

注3 小矢部市教育委員会 1971 『小矢部市史』

注4 伊藤郷圃 1958 『中世住居史』東京大学出版会

注5 河西健二 1994 「Ⅵ 研究レポート 雑記 建物遺構—古墳から近世まで—」『歴史文化財年報(5)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
1994 「第四章 まとめ 3 中世末から近世の建物」『梅原胡堂遺跡発掘調査報告(遺構編)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注6 富山県 1973 『富山県史 民俗編』

注7 越前慎子 1994 「地崎遺跡の井戸」『歴史文化財年報(5)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注8 宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料」『大城』第12号 富山考古学会

注9 富山県文化振興財団 1996 『梅原胡堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』

注10 富山県埋蔵文化財センター 1990 『富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要1 栗山林原遺跡』
1991 『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』
1994 『富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査報告(4) 吉倉B遺跡』

注11 富山県埋蔵文化財センター 1996 『任海宮田遺跡発掘調査報告書』

注12 吉田裕子 1998 「中世遺跡出土の墨書土器について」『富山考古学研究会 紀要創刊号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

- 注13 上市町教育委員会 1981～1985 『弓庄城跡 緊急発掘調査概要』
- 注14 福野町教育委員会 1989 『寺家新屋敷跡Ⅱ』
- 注15 砺波市教育委員会・砺波郷土資料館 1992 『富山県指定史跡 増山城跡調査報告書』
- 注16 仲山英樹 1995 「墨書土器と集落遺跡」『歴史評論 No538』 校倉書房
- 注17 清水みき 1987 「墨書土器の機能について—郡城（長岡京）の墨書土器を中心に—」『研究紀要 第2号』向日市文化資料館
- 注18 山中 章 1989 「古代都城の編制土器・記号墨書土器」『古代文化 第41巻』財団法人 古代学教育
- 注19 徳永光俊 1996 「日本農法の仕組み—近世農書にみる作りまわし—」『金沢経済大学論集 第30巻第1号』金沢経済大学経済学会

5 開群大滝遺跡で検出された液状化現象の痕跡

寒川 旭

1995年1月17日の午前5時46分に発生した兵庫県南部地震(M7.2)は、阪神・淡路地域に激しい災禍をもたらした。同時に、「活断層」や「液状化現象」という専門用語が、私たちの生活にかかわりの深いものとして、広く知られるようになった。

大きな地震が発生する場所は二つある。日本列島の太平洋沿岸の海底などにある「プレート境界」と、列島各地に分布する「活断層」である。そして、プレート境界の地震としてよく知られる南海地震や東海地震は百年余の周期で発生し、活断層は千から万年単位の周期(もっとも短いもので千年程度の間隔)で活動すると考えられている。

過去に発生した大きな地震の履歴を知るには三つの方法がある。

一つは、活断層を直接発掘して時代の異なる地層の食い違いを比較するもので「活断層のトレンチ調査」と呼ばれる。1978年以来、日本では毎年数カ所で実施されてきた。特に、阪神・淡路大震災以降、通商産業省地質調査所や科学技術庁・地方自治体が、全国の百の活断層についてこの方法で研究するプロジェクトを進行させており、多くの成果が得られつつある。

次は、古文書などの地震史料を用いる方法である。1891年の濃尾地震発生直後に震災予防調査会が設立され、地震史料の体系的な収集が始まった。現在までに膨大な史料が集められ、武者金吉による『増訂大日本地震史料』と宇佐美龍夫による『新収日本地震史料』は、地震に関する記録を時代順に整理した史料集として、よく利用されている。

三番目考古学の遺跡発掘現場で地震の痕跡を研究する「地震考古学」である(寒川, 1992, 1997など)。現在、日本全国の発掘現場で、過去の地震の痕跡が様々な姿をあらわしている。遺跡の発掘調査は、私達の祖先の生活が及んだあらゆる場所で行われるので、地震の痕跡が検出された場合、遺構や遺物との前後関係を考えることによって、地震の成因となった地震の年代を限定できる。歴史時代の場合、地震史料の中でこれに該当する地震の記録と対応がつけば、地震跡形成の年月日や時刻まで知ることができる。

1980年代中ごろまでは、遺跡の中で、断層・地割れ・地滑り・液状化などの地震に伴う地変の痕跡が顔を出しても、そのまま見過されるが多かった。しかし、最近では、この分野の普及のおかげで、全国各地の遺跡から地震の痕跡が報告されている(埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会, 1996など)。地震をおこす活断層だけでなく、周辺の様々な地質条件に対応した様々な地変の様子がわかるので、地震の予知は勿論、被害の軽減に大きく貢献できそうである。

地震の痕跡

兵庫県南部地震では、戦後の数10年間大きな地震を経験しなかった阪神・淡路地域の大地に様々な爪跡が刻まれた。

まず、地震断層。写真1は今回の地震を引き起こした野島断層の一部である。特に変位量の大きかった平林地区では、約2.1mの右横ずれと、約1.3mの縦ずれが見られた。

六甲山地南麓沿いの海岸に沿う埋め立て地では、広範囲に液状化現象が発生し、あたり一面噴砂に覆われた。写真2は地割れに沿って砂が噴き出したもので、多くの噴砂丘の断面形を観察すると砂の

流れだした過程がよく分かった。

第193図は最も一般的な事例を示したものである。まず、細い砂が広範囲に流れ出し、次いで、粗粒砂と礫が地割れから顔を出して噴砂丘をつくる。最後に細い砂に変わっている。

これから、次のような解釈が出来る。—— 最初の割れ目が狭い段階で、地下水と共に細かい砂が広範囲に流れ出し、薄く堆積した。次いで、割れ目が広がるにつれて粗い粒子が顔を出し、割れ目の周囲に噴砂丘を作った。最終段階で、間隙水圧が低下するにつれて流れ出す粒子も小さくなりこれが噴砂丘を薄く覆った。—— このように、数分以内の短時間でも、噴砂の流出の様子が変わり、粒子の大きさも変化することを知る具体的な事例が得られた。

液状化現象

今回の地震で沖積地に最も多く出現し、遺跡の発掘中に最も多く検出されるのは液状化現象の痕跡である。この現象は、地表からさほど深くない所にゆる詰まりの砂（礫）が堆積し、地下水で満たされている状態で、人の立っておれないほどの強い地震動が加わって発生する。

地下の砂粒は、通常は、お互いに支えあって安定している（第194A図）。そこへ、激しい地震動が加わると支えがはずれ、それぞれの粒子がすき間を小さくして、より安定するように移動する。このため、地層の一部が収縮し、すき間を満たしている地下水が圧迫されて水圧が上昇する（第194B図）。やがて、水圧の高まった水が、砂粒や周囲からの土圧を支えるようになり、地層全体が液体の性質を持つようになる（これが「液状化」である）。

さらに、水・砂が上位にある地層を引き裂きながら「噴砂」として上昇したり（第194C図）、地層の弱い部分を探しながら横方向に流れ動いたりする。そして、液状化現象の存在を確認することは、過去に激しい地震動が存在したことの証明となる。

図195は遺跡で検出される液状化跡を模式化したものである。

aは地震当時の地表面に噴き出して広がった砂（噴砂）がよく残っているもの、bは噴砂が侵食されて残っていないものである。地震の発生した年代は、a・b共にⅡ層堆積後でⅠ層堆積前に限定される。a・bのように砂のつまった割れ目を砂脈という。地震当時の地層面まで達しなかった砂脈がc・d・eである。砂脈が地表まで達したかどうか判定することが、地震の時期を決める場合に、特に重要になる。また、液状化した地層はfのような地滑りをおこし易いし、奇妙な構造（模様）が残っていることが多い。地層の一部が大きくかきまぜられたような擾乱構造（イ）、砂の筋が上へむかって細くのびる柱状構造（ロ）、いくつもの皿を横にならべたような皿状構造（ハ）、すべて水と砂が流動したことを示す構造である。

開群大滝遺跡で検出された液状化の痕跡

開群大滝遺跡の発掘調査において、鮮明な液状化の痕跡がいたるところで検出された（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、1994など）。著者は、主に発掘区Cの痕跡を観察したので、C地区の状況を中心に説明したい（第196図）。

C地区の砂脈の中で最も一般的な平面形態を示すものを第197図に示した。この図のように、最大幅16cmの砂脈（噴砂のつまった割れ目）が北北東-南南西方向に約11mにわたって断続的に発達し、一部で遺構の埋土を引き裂いていた。砂脈の内部は、北部では礫（最大径3.5cm）や粗粒砂で満たされ、中-南部では粗-中粒砂で構成されていた。

第198図は砂脈に直交するトレンチの壁面 (X42Y87とX43Y87) を示したもので、説明の便宜上、上位よりⅠ～Ⅳ層と区分する (以下、各図ごとに、上位よりⅠ・Ⅱ～と名づけるが、同じ名称でも図が異なれば地層も異なる)。

Ⅰ層は砂礫、Ⅱ層は細～極細粒砂層である。Ⅱ層中では、堆積時の級化作用によって、粒子のふるい分けが進み、上ほど細かい粒子で構成されていた。最も顕著な液状化現象が認められるⅢ層は粗粒砂 (第199図)、Ⅳ層は砂礫層である。Ⅳ層では礫 (最大径12cmの匪円～円礫) が卓越しており、粗粒砂が少し含まれていた。

第198図A・B共に、Ⅲ層で激しい液状化が生じ、10～20cmの幅でⅡ層を引き裂きながら、Ⅲ層中の粗粒砂が上昇していた。この過程で、Ⅱ層は小さなブロックに分かれてⅢ層の中に浮遊した状態になり、一部は大きく回転していた。Ⅲ層を構成する粗粒砂から生じた砂脈が、Ⅱ層を引き裂きながら、斜および水平方向にも伸びたことが、Ⅱ層のブロック化を顕著にしている。

一般に、砂礫層は液状化し難いと考えられているが、第198図A・Bいずれも、わずかながら砂礫層に液状化に伴う変形がわずかながら認められた。特にB (第198図) では、図の中央でⅣ層 (砂礫層) が盛り上がり (写真3)、図の右隅では、Ⅱ層中に突き上げるような動き (柱状構造; 第195図) が認められた。

発掘区Cの別地点では、最大幅18cmの砂脈が、石組井戸 (SE524) や溝の埋土を引き裂いてS字形に発達していた (第200図、写真4)。この砂脈の中心部は中～粗粒砂で満たされ、末端部はやや細かい粒子 (中粒砂のみ) で構成されていた。

写真5は石組井戸の中心に沿うトレンチの壁面である。井戸の南 (写真では左) 側では、厚さ20cmの中～粗粒砂層が液状化して水平方向 (写真の右方向) へ流動していた。この結果、井戸の石組と奥込め土が、共に上下に引き裂かれ、上半分が約20cm上昇していた。そして、井戸の中央に達した砂は90度向きを変え、今度は石組を約18cmの幅で左右に引き裂きながら上昇していた。

第201図は砂層と噴砂の粒度組成を示したものである。液状化した砂層は、下ほど粗く (写真5の②) 上ほど細かい粒子 (①) で構成されており、堆積当時の級化作用によって粒子がふるい分けられた状態が保たれていた。このことから、この層で液状化が生じて水平方向に流動したものの、内部の砂が上下にかき混ぜられなかったようである。ところが、砂脈が井戸の内部に達して上昇した段階 (第201図の③) では、粒子の大きさが均一となり、①・②をミックスした状態となる。1度、この段階に至るまでに砂が全体に混じり合ったものと思える。

第202図は、写真5の反対側の壁面で、井戸の外側の状態を示したものである。ここでもⅢ層 (中～粗粒砂) が激しく液状化し、Ⅰ層 (細粒砂) とⅡ層 (最大径3cmの礫を含む粗粒砂) が上下と横方向に引き裂かれていた。また、Ⅳ層 (最大径11cmの礫を含む砂礫) とⅤ層 (最大径4cmの礫を含む中～粗粒砂、第198図) でも液状化が生じ、Ⅳ層がⅢ層中に少し突き上げるような (柱状) 構造を示し、Ⅴ層は上へ向かって盛り上がっていた。

第199・201図のように、上述の断面中で液状化にともなって激しく流動した地層はすべて、日本港湾協会 (1979) による、粒度組成から見た液状化し易さの分類 —— A: 特に液状化の可能性あり、B: 液状化の可能性あり —— のAに属しており、最も液状化し易い粒度組成であった。

第203・204図 (写真6) はC地区の北部で検出された住居跡 (SK67) に関するものである。一連の図のように、住居跡の中央を最大幅7cmの砂脈が北北西～南南東方向に横切り、住居跡とその埋土が引き裂いていた。砂脈の内部は粗～中粒砂で満たされ、床面や埋土には、東側が最大5cm上昇する

ような食い違いが生じていた。

第205図BはC地区のX35Y78で認められた痕跡で、液状化した砂層が複雑な動きを示していた。説明の便宜上、図の上位からⅠ・Ⅱ・Ⅱ'・Ⅲ1・Ⅲ2・Ⅲ3・Ⅲ4・Ⅳ層と呼ぶ。Ⅰ層は最大径9cmの礫を含む砂礫、Ⅱ層は細粒砂でⅡ'層(粗粒砂)をレンズ状に含んでいた。Ⅲ1層は中～粗粒砂、Ⅲ2層は極細～細粒砂、Ⅲ3層は細～中粒砂、Ⅲ4層は粗～中粒砂、Ⅳ層は最大径9cmの礫を含む砂礫である。

Ⅲ1～Ⅲ3層で液状化が生じ、図の中央の砂脈(S1)へ向かって、それぞれの地層から供給された砂が流動していた。この過程は第205図A・Bのような2段階に分かれる。

激しい地震動に伴って、まず、Ⅲ1層がⅠ・Ⅱ層を引き裂きながら(幅3cm程度)、地表へ向かって上昇した(第205図A)。次いで、砂脈を幅7cm程度まで押し広げながらⅢ3層が上昇した。この段階でⅢ1層の流動は止まり、砂脈の位置や、砂脈から15cm西(図の左側S2)でⅢ3層の中～細粒砂がⅢ1層を引き裂いた。S2ではⅡ層は引き裂くことができず、第195図で示した柱状構造となった(第205図B)。

第206図は南側壁面のSF1084の状況を示したものである。ここでは、最大径14cmの礫を含む砂礫層(Ⅲ層)で液状化が生じ、上位にある極細粒砂層(Ⅰ層)と粘土層(Ⅱ層)を引き裂く幅2～3cmの砂脈を通して、粗粒砂と礫(最大径5cm)が上昇していた。砂脈の最下部に礫が取り残されており、砂の方がスムーズに上昇したことを示している。また、砂脈を境にして、東側(図の右側)が約7cm低くしていた。これは、液状化したⅢ層が流動して、Ⅱ層が東(図の右)へ向かって滑り動いたことを示している。

別の地点でも、第207図のように砂脈の両側で地層の食い違いが生じていた。Ⅱ層(粗～中粒砂)の上面では北東側が9cm低く、Ⅱ層の下面ではほぼ同じ高さになっていたが、Ⅲ層(最大径10cmの礫を含む砂礫層)が液状化して流れ動き、沈降しつつあるⅡ層の下部を削り取ったものと思える。

一方、A地区でも多くの液状化跡が検出されており、その時期や形成などはC地区とよく似ていた。

第208図はA地区南端付近(X32Y103)の液状化跡の断面図で、説明の便宜上Ⅰ～Ⅳ層と名付ける。Ⅰ層は暗灰色シルト、Ⅱ層は粗粒砂、Ⅲ層は細粒砂、Ⅲ'層はⅢ層中にレンズ状に含まれる中～粗粒砂、Ⅳ層は砂礫層である。

図のように、Ⅳ層で液状化が生じ、最大幅40cmの砂脈内を砂と礫が上昇していた。砂脈の最下部には、最大径5cmの礫が含まれるが、上へ向かって粗粒砂、さらに中粒砂と、粒子が小さくなっていった。この砂脈はⅠ層に覆われており、Ⅰ層形成前に生じた地震の産物である可能性が高い。

(液状化をもたらした大地震)

上述の液状化跡の大半は、様々な遺構および、その埋土まで引き裂いていた。そして、これらの遺構は中世(16世紀頃)に形成されたと考えられているので、地震の時期も遺構が埋積されてからの近世と考えられる(富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所1994)。一方、A地区の第208図に示した部分では、砂脈が近世はじめの地層に覆われているため、中世後半頃に生じた液状化の痕跡の可能性が高い。

このように、当遺跡の液状化跡の多くは近世、そして一部は中世終り頃に形成されたと考えられる。また、いずれの場合も、一般に液状化し難いと考えられている砂礫層でも液状化現象が発生して、砂脈内に礫が上昇している。このことから、震度6程度の強い地震動が当遺跡周辺に生じたことが推測

される。

このような年代に該当する大地震として、1586年に生じた天正地震と1858年の飛越地震があげられる。

まず、天正地震は、1586年1月18日(旧暦で天正13年11月29日)亥下刻(午後10時すぎ)に発生し、中部地域西部と近畿地域東部に激しい被害を与えている(宇佐美, 1996など)。この地震は2系統の活断層系がほぼ同時に活動して生じたもので、これまでに行われた活断層の履歴調査から、阿寺断層系(佃他, 1993など)・御母衣断層系(杉山他, 1993など)など(法林寺断層も活動した可能性がある)と共に、養老断層系を含む伊勢湾西岸の活断層系が活動した(須貝他, 1999)と考えられている(第209図)。

天正地震について、『飛騨鑑』に「棉雲之峰二つに割、前之高山並大川打越、内ヶ島打埋申候、人一人も不残、内ヶ島の家断絶」と記されるように、棉雲城が山崩れで埋没し、一瞬にしてこの世から消えたことがよく知られている(文部省震災予防評議会編, 1941など)。

一方、当時、富山県の小矢部市と福岡町の境界付近に前田秀継の居城である木舟城とその城下町が発達していたが、この地震によって「地震ありて貴舟の城をゆり崩(『富樫家々譜』)」「木舟の城を三丈ばかりゆりしづめたり、家たふるる事数しらず(『三壺閑記』)」という大被害を受けた(東京大学地震研究所編, 1981など)。この時、秀継は圧死し、城下の人々も周辺へ移転したため、城下町は消滅してしまった。

当遺跡では、木舟城下町の一部が発見され、多くの遺構もこれに属するものなので、地震と城下町の衰亡に関する史料の記述を裏づける貴重な成果となっている。A地区での地震跡も天正地震の爪跡の可能性が高い。

飛越地震は1858年4月9日(安政5年2月26日)の午前2時頃に生じ、富山平野周辺に激しい被害を与えた。活断層の発掘調査から跡津川断層(第209図)の活動によることがわかり(竹村・藤井, 1984など)、この断層に近接した位置では、家屋の倒壊率が極めて高い値を示している(宇佐美, 1996)。また、常願寺川上流で大規模な山崩れが生じ、地震から二週間後に、常願寺川周辺で大規模な「泥洪水」が襲っている。

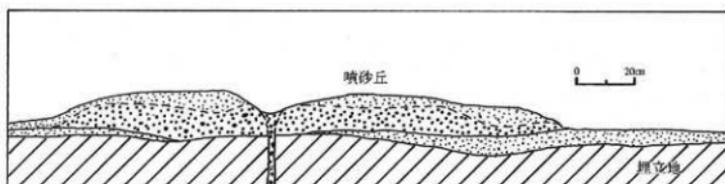
当遺跡の周辺でも、高岡市の市街にある河原町で“ことの外(震動が)大きく、その上、地面が所々割れ、底から水と砂を吹き出した”(『木町委細帳』)という記録がある。小矢部市の今石動でも「家十五軒斗つぶれ(中略)町中割れ、其中より水ふき出し申候(『諸品古凶災変公事自他雜記』)」と書かれている(東京大学地震研究所編, 1986)。

当遺跡で検出された液状化の痕跡は、富山平野周辺地域の断層活動や地盤災害を考える上で貴重な資料と思える。最近、周辺地域の遺跡からも地震の痕跡が見いだされつつある(婦中町教育委員会, 1993; 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, 1993; 福岡町教育委員会, 1995など)が、今後、多くの資料が加わることによって、富山平野を襲った地震の全体像や地盤災害の様子が詳しく分かるであろう。

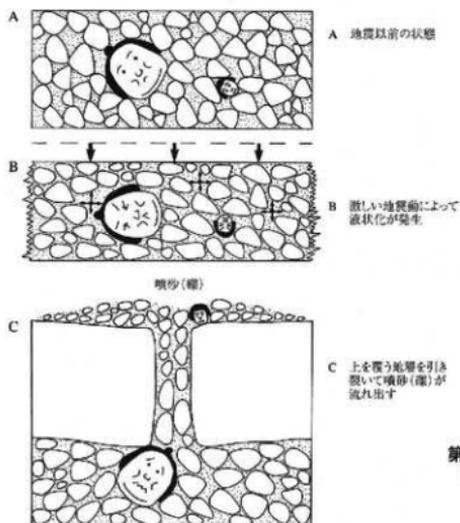
本稿をまとめるに当たり、富山県文化振興財団の池野正男氏・柴口貞澄氏・三島道子氏、富山県教育委員会の河西健二氏をはじめ、多くの皆様にお世話になりました。

文献

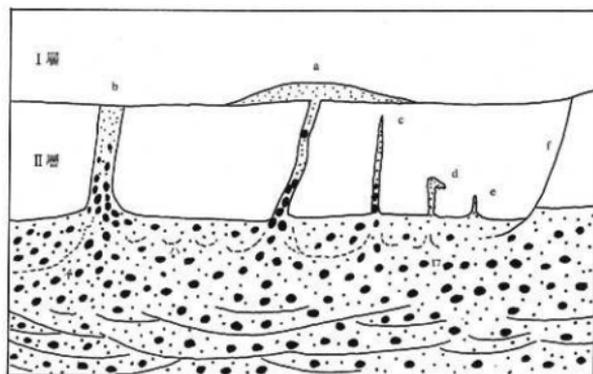
- 福岡可教育委員会 (1996) 富山県福岡町石名田水舟道跡発掘調査報告書。
- 福中町教育委員会 (1993) 富山県福中町友坂道跡発掘調査報告Ⅱ。
- 遺文関係救済連絡会議・埋蔵文化財研究会編 (1996) 発掘された地震痕跡。
- 文部省震災予防評議会編 (1941) 増訂大日本地震史料 第1巻。鳴鳳社。
- 日本港湾協会 (1979) 港湾施設の技術上の基準・同解説。
- 栗川 旭 (1992) 地震考古学——道跡が語る地震の歴史——。中公新書。
- 栗川 旭 (1995) 阪神・淡路大震災と兵庫県の地震考古学。ひょうご考古。創刊号, 1-14。
- 栗川 旭 (1997) 揺れる大地 日本列島の地震史。同朋舎出版。
- 須貝俊彦・伏島祐一郎・栗田泰夫・吾妻 崇・苅谷愛彦・鈴木康弘 (1999) 養老断層の完新世後期の活動履歴—1586年天正地震・745年天平地震震源断層の可能性。平成10年度活断層・古地震研究調査概要報告書, 工業技術院地質調査所, 89-102。
- 杉山雄一・栗田泰夫・佃 栄吉 (1993) 1990年御母衣断層系・三尾河断層 (寺河戸地区) トレンチ調査。活断層研究, 11, 71-77。
- 竹村利夫・藤井昭二 (1984) 飛騨山地北縁部の活断層群。第四紀研究, 22, 297-312。
- 東京大学地震研究所編 (1981) 新収日本地震史料 第1巻。
- 東京大学地震研究所編 (1986) 新収日本地震史料 第5巻 別巻4。
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 (1993) 埋蔵文化財年報(平成4年度)。
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 (1994) 埋蔵文化財年報(平成5年度)。
- 佃 栄吉・栗田泰夫・山崎晴雄・杉山雄一・下川浩一・水野清秀 (1993) 2,5万分の1阿寺断層系ストリップマップ及び同説明書。構造図(7), 地質調査所。
- 宇佐美龍夫 (1996) 新編日本被害地震総覧 (増補改訂版416-1995)。東京大学出版会。



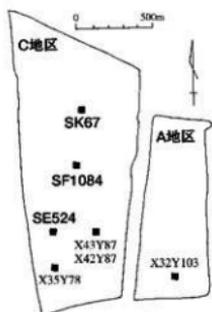
第193図 兵庫県南部地震において海岸の埋立地に流れ出した噴砂(寒川, 1995より)
 図中のドットの大きさは噴砂の粒子の大きさを表現している。



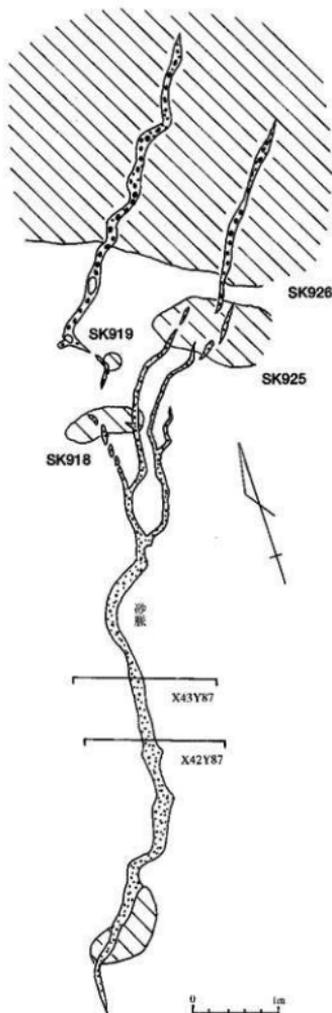
第194図
 液状化に伴う噴砂の流出
 (寒川, 1992より)



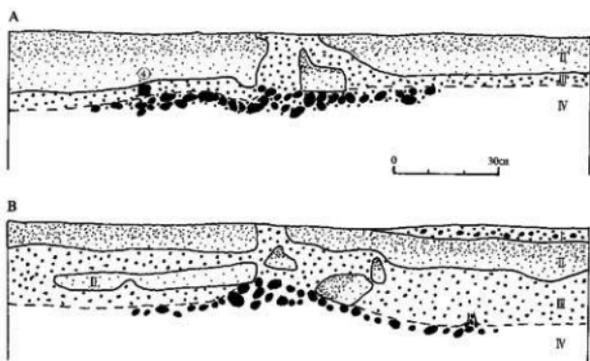
第195図
 液状化跡の模式図
 (寒川, 1997より)



第196図 開群大滝遺跡
地震跡に関する位置図

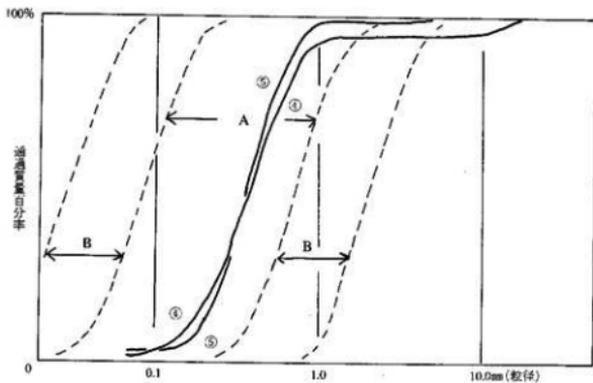


第197図 砂脈の平面形とトレンチの位置
図中のドットの大きさは粒子の大きさに対応している。
斜線で示したものは遺構の埋上



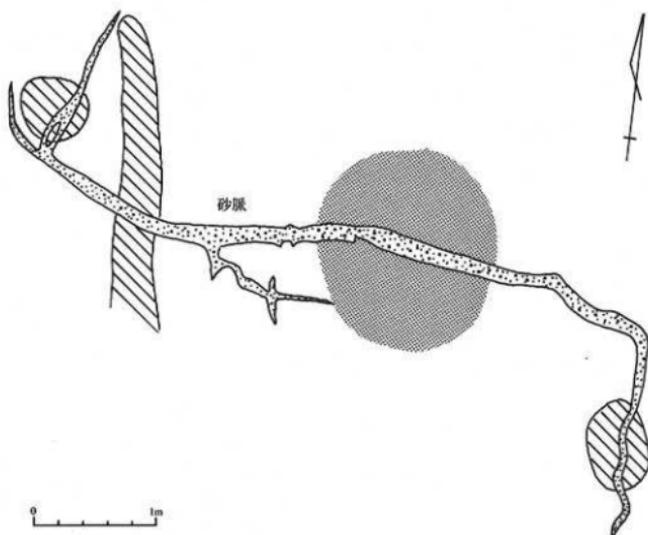
第198図 液状化跡の断面図

AがX42Y87, BがX43Y87で■印は粒度分析試料④の採取位置

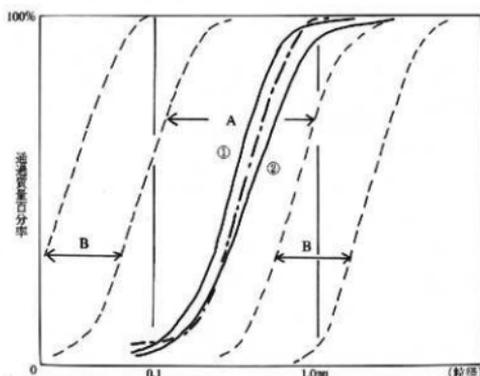


第199図 液状化した地層の粒径加積曲線

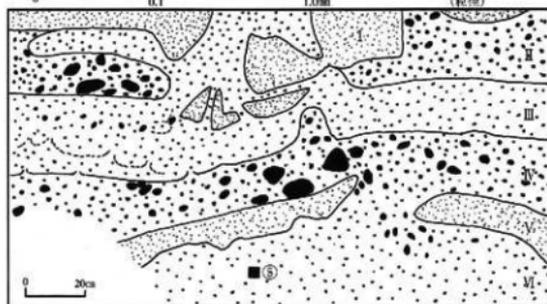
A: 特に液状化の可能性あり
B: 液状化の可能性あり



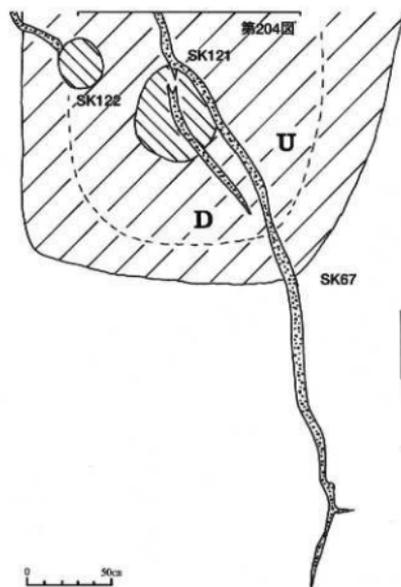
第200図
石組井戸 (SE524) を引き裂く
砂脈の平面図
斜線は遺構の埋土
アミ部分は石組井戸とその埋土



第201図
石組井戸 (SE524) を引き裂いた砂の
粒径加積曲線
①・②は実線、③は一点鎖線で示した
A:特に液状化の可能性あり
B:液状化の可能性あり



第202図
石組井戸 (SE524) の南側における液状化跡の断面図
■印は粒度分析試料⑤の採取位置



第203図

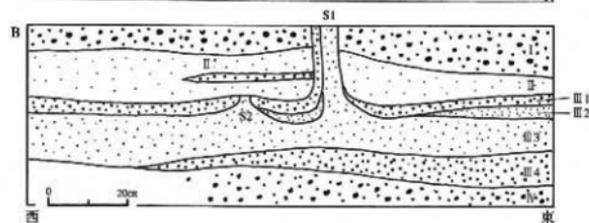
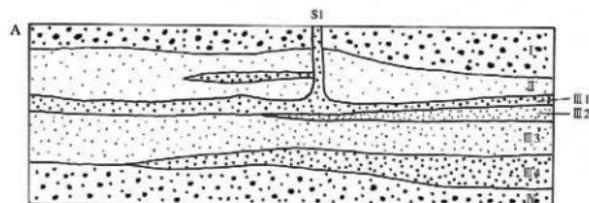
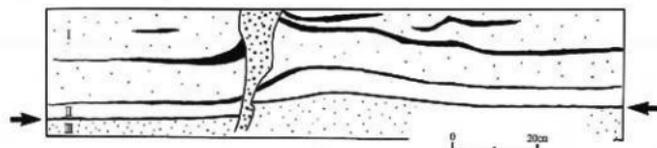
土坑 (SK67) を引き裂く砂脈

粗な斜線はSK67
密な斜線はその他の遺構を示す
(砂脈は埋土まで引き裂いていた)
U:相対的に上昇した例
D:相対的に下降した例
(U・Dの落差は最大5cm)

第204図

土坑 (SK67) を引き裂く砂脈の断面図

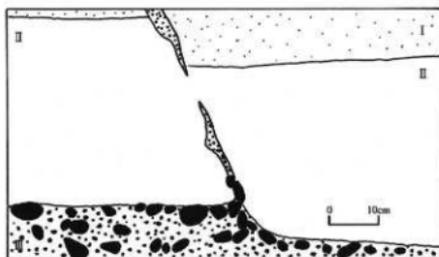
Iシルト～極細粒砂 IIシルト III極細粒砂
黒くぬりつぶしたのは炭化物を含む層
矢印は床面を示す
(図204の位置は図203に示した)



第205図

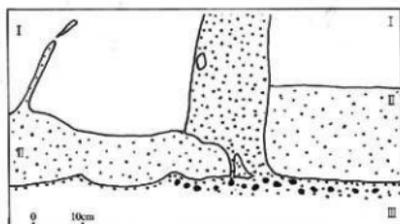
X35Y78地点での
液状化に伴う地層
の流動過程

最初AのようにIII1層が
流動し次いでBのように
III3層が流動した



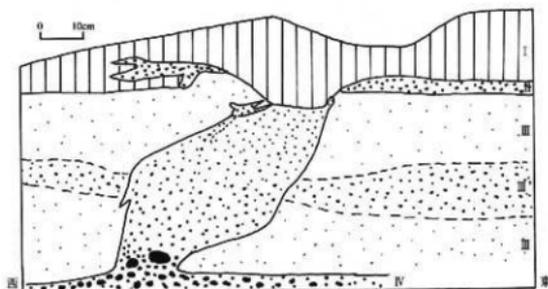
第206図 SF1084での液状化跡の断面図

- I: 極細粒砂
 - II: 細粒砂を含む粘土
 - III: 砂礫
- (図の左側がN70°Wの方向)

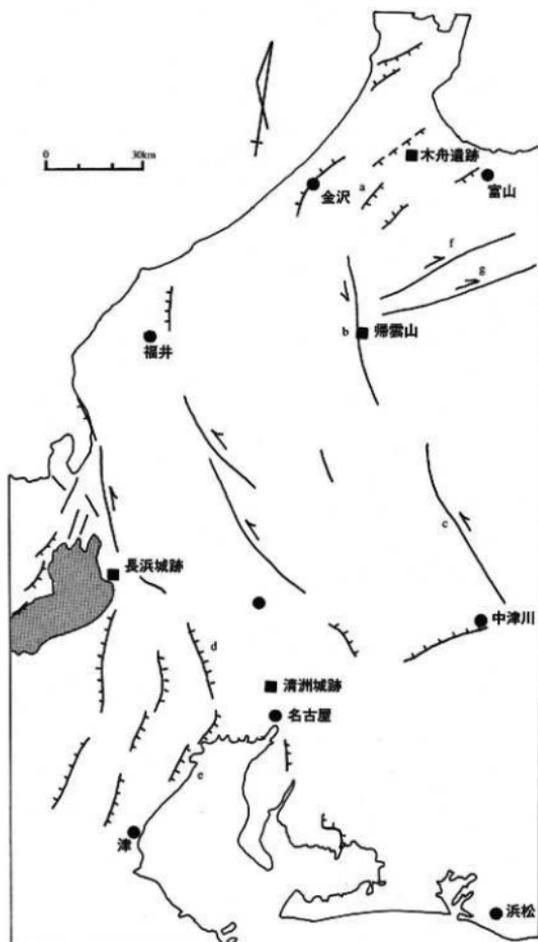


第207図 液状化跡の断面図

- I: シルト～粘土
 - II: 粗～中粒砂
 - III: 砂礫
- (図の左側がN25°E)



第208図 A地区南端 (X32Y103) における液状化跡の断面図



第209図 中部地方から近畿地方東部にかけての活断層の分布 (寒川, 1997より)

a 法林寺断層 b 御母衣断層系 c 阿寺断層系 d 養老断層系
e 桑名・四日市断層系 f 牛首断層 g 跡津川断層



写真1

野島断層の活動による道路の切断(平林地区)

野島断層に沿って、道路が上下(向う側が上昇)および右横ずれ(写真の矢印の方向)方向に食い違った



写真2

兵庫県南部地震によって西宮市の海岸の埋立て地に流れ出し噴砂



写真3

X43Y87における液状化跡



写真4
石組井戸 (SE524) を引き裂く砂脈



写真5
石組井戸 (SE524) を引き裂く砂脈の断面形態



写真6
土坑 (SK67) を引き裂く砂脈
写真では埋土が取り除かれているが、砂脈は埋土も切断していた

第Ⅵ章 結 語

平成5年度に実施した開群大滝遺跡、地崎遺跡の調査は能越自動車道建設に伴う本調査の二年目に当たる。調査面積は開群大滝遺跡が25,163m²、地崎遺跡が1,636m²の計26,799m²である。

遺跡の立地は庄川や小矢部川の扇状地末端部の沖積平野にあたる。度重なる洪水や地震の被災痕跡を残し、また地下水位が非常に高い自噴地帯であり、必ずしも自然環境には恵まれていない。

開群大滝遺跡

開群大滝遺跡の調査で大きな成果があった。その第一は町屋のほぼ全体が調査区内に入り余容を知り得たことであろう。開群大滝遺跡の遺構の配置は狭い区画に建物等が密集する町屋のイメージを大きく変えた。町屋群は南北に150m以上、東西に約90mの範囲に広がり、周辺は空白域となり、他の城下とは南北に延びる道路で結ばれる。木舟城周辺に位置し城下の一角をなす可能性が高い五社遺跡・石名田木舟遺跡の中世に遺構の盛衰をみると、地点によって存続時期が異なり、また遺構の全くみられない空白域が多く存在する。このことは時代、時期によって選地がなされて散在し、限定された範囲内で城下を構成されていないことを物語る。自然環境に大きく左右された結果ではなかろうか。交通手段は遺跡の両側には近世まで機能する自然流路があるが、中世の遺物は出土しないことから利用されず陸路のみであろう。ちなみに開群大滝遺跡は木舟城の北北東方向約870mに位置する。

南北に延びる道路は遺跡内で二股に分かれ、遺跡外で合流すると推定される。道路の配置は東西両端に位置し、町並の中心は道路に挟まれる。東側の道路は中央に溝が掘られ左右を区画する。側溝や石敷等の施設は無いが、遺構の空白域で幅は約10mと広い。道路2は道路1と同様の幅をもち施設等は認められない。

道路に挟まれた部分の町屋には道路側に開いた短冊形の区画溝が伴う。道路1西側建物群の区画地口には大小があり、最小は7mで朝倉城下の町屋規模に近いが、最大の地口は28mを越え大規模で奥行きも長い。これに対して背中合わせに位置する道路2東側建物群は20m～32mで地口が広い区画が多いが奥行きは比較的短い。

区画内の建物は小規模な掘立柱建物で道路際に配置され、小区画は1棟、大区画の場合は数棟の建物で構成される。中程から奥は空白域となり、余裕をもった配置状況である。井戸は道路際の建物に伴い便所遺構はあきらかでないが奥には出がけがあり、区画内はそれぞれ独立した空間域となり、屋敷割が明確である。

これに対して東側に位置する町屋には区画溝がなく、建物の配置からは屋敷割が明確でなく、建物間隔も狭く乱雑で区画をもつ建物群とは明らかな格差が認められる。

建物は54棟が復元できた。しかし、柱根を残すが建物として捉えきれなかったものもあり、実数は更に増えるであろう。建物は掘立柱建物で柱の配置は不揃いで掘り込みの浅い建物が多く、大胆に復元した建物もある。建物規模は床面積が10m²～20m²台が主体をなし小さい。また、区画規模による建物格差は顕著でない。

最後に遺跡の普請を推定する。まず道路法線が決められ、道路1の西側屋敷割を中心に行われ、最後に道路1の東側建物群が配置されたかと推定され、この地区には大きな規制は働かなかつたのであろう。

成果の第二は中央に円形焼土面をもつ土坑の存在である。土坑には石敷されたもの、埋土のみの二

種類がある。遺存状況には格差があり、明確な数値は出せないが30基前後にはなる。土坑の埋土上面に円形被熱痕を残す。直径は17cm前後で、上面は赤色酸化面で下面は吸炭層となり、地上面に伸びた何らかの施設が想定され、検出土坑はその下部施設となる。石敷は保温、防湿を目的とした施設であろう。類似遺構は管見にはないが、最も可能性が高いのが鍛冶炉や溶解炉であろう。また、炉壁も出土している。土坑の位置は建物内に位置するものが多い。金属製品の中には遺跡の格に不釣り合いなものがあり、強ち無理な想定でないであろう。但し、炉の規模は小さく鋳造しや再生産のための炉であろう。この想定が正しいとすればかなりの数が鋳物師や鍛冶師の職人集団の建物群となる。

その第二は出土遺物にある。遺物には土器、陶磁器、木製品、金属製品、石製品があるが出土量は非常に少ない。その中から日常生活で使用する製品を除くと、鍛冶滓、埴埴、炉壁、羽口、小札、弁・匙・鉄鍬・銅板・飾り金具、小柄、漆液容器、砥石などが特殊品として残る。鍛冶滓・ガラス滓は量は少ないが遺跡全体から出土している。埴埴の出土は僅か1点のみで小型の未使用品である。

炉壁は井戸に廃棄された状況で出土した。また、匙などの金属製品は特殊品とは言いつれない製品も含まれるが、遺跡の格を勘案すると特殊品になろう。これらの多くは再生産のために集められた遺物と考えたい。漆液容器は漆器碗を転用したもの、曲物を利用したものの計3点がある。漆は塗師のみならず金属製品や漆接ぎ等に広く使用して特定は難しいが小札が比較的多く出土していることから具足師が使用したと推定する。砥石は一般集落でも出土するが泥岩製の仕上げ砥石が多いことに注目したい。この様に特殊遺物から想定される職種は鋳物師、鍛冶師、具足師などの職人となり、遺構から導き出された職人像とはほぼ一致する。

遺物の時期は最も短期間で廃棄される中世土器からみると、16世紀中頃前後から末頃の50~60年間の短期間の存続期間となる。遺跡成立の契機は文献資料を含めて明確でないが計画的に配置された町並みであることが伺える。

第四に地震痕跡を数多く確認したことであろう。成果は寒川氏によるところが大であるが、噴砂は遺構や埋土を切り裂いており、江戸時代の安政の地震痕跡の可能性が高い。ともかく富山県における地歴考古学の先鞭をつけた意義がある。

以上のように幾つかの調査の成果を取り上げたが、今後の木舟城城下の全容を知る上で大いに参考になろう。特に注目したいのが、城下は城を中心に同心円的に広がるのでなく点在する点である。木舟城は12世紀末に石黒氏が構築し、16世紀末に廃城となる間の400年余りの長きに亘り存続する。この間に幾度の洪水を受け、前述したように時代、時期によって適所に灌地を行われ、計画配置する。

地崎遺跡

調査の成果の第一は中世末から近世の建物が検出できたことである。近世に入ると建物構造が大きく変化し考古学からの検証が非常に難しくなり、県内では近世建物の復元例は皆無に近い。地崎遺跡の建物は掘立柱を併用するため、近世家例を参考に復元できた。なお、建物規模や付属遺構は民家の域を出ない。

第二は近世民家における土器、陶磁器の実体が把握できたことであろう。土器、陶磁器の供給地は中世と大きく異なる。輸入陶磁器は皆無となり、国産品が多くなる。国産品の中でも瀬戸美濃製品は激減し、越中瀬戸、唐津、伊万里が取って替わり、県内の一般的状況に符号する。この中でも越中瀬戸の比率が高いが、器種は皿類、播鉢に限定される。また、越前の甕は使用されない。

このころに再び墨書土器、墨書陶器の比率を増す。意味合いは必ずしも明確でないが、吉祥句的な面もあるが家号やセットで揃えた器種の番号とも考えられないであろうか。(池野正男)

報告書抄録

ふりがな	かいほつおおたきいせき・ちさきいせきはつくつちようさほうこく							
書名	開群大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告							
副書名	能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	II							
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	池野正男, 中川道了, 越前慎子, 三島道子							
編集機関	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL076-442-4229							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
開群大滝	西砺波郡福岡町開群	16422	079	36度41分 13秒	136度55 分34秒	19930519～ 19931221	28,063m ²	道路(能 越自動車 道)建設 に伴う事 前調査
地崎	小矢部市地崎	16209	168	36度41分 20秒	136度54 分20秒	19930511～ 19930727	1,636m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
開群大滝	集落跡	中世	掘立柱建物54棟 横溝12条 溝166条 井戸32基 上坑283基 石列1条 道路2条	中世土師器, 珠洲, 越前, 瀬戸美濃, 中国製白磁, 中国製青磁, 中国製灰付, 越中瀬戸, 唐津, 伊万里, 木製品, 石製品, 金属製品, 炉, 炭, 鉄滓		16世紀後半の木舟城域下集落		
		近世	畠溝3条 上坑4基	中世土師器, 珠洲, 瀬戸美濃, 中国製白磁, 中国製青磁, 中国製灰付, 越中瀬戸, 唐津, 伊万里, 木製品, 石製品, 金属製品				
地崎	集落跡	近世	掘立柱建物4棟 溝22条 井戸3基 上坑63基	土師器, 珠洲, 八尾, 瀬戸美濃, 信楽, 輸入陶磁器, 越中瀬戸, 唐津, 伊万里, 須佐唐津, 土師質土器, 木製品, 石製品, 金属製品		17世紀後半～18世紀の集落		

2000 (平成12) 年 3 月 15 日 印刷
2000 (平成12) 年 3 月 31 日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第11集
開群大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告

— 能越自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘報告Ⅱ —

(第一分冊)

編集・発行 財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL. 076-442-4229

印刷 北日本印刷株式会社
〒930-0094 富山市安住町7番36号
TEL. 076-432-2126